

近代日本版画家名覧 (1900－1945)

〈凡 例〉

- 1、作家の選択は、凡そ1900（明治33）年から1945（昭和20）年までに版画制作の記録が残る作家（アマチュアを含めて）を採録した。但し児童版画は含まない。
- 2、作家名については、典拠文献や参考文献を参照し、それ以外是一般的と思われる読みを採用した。
- 3、年記は西暦を基本として、生没年については（ ）内に元号を表記した。
- 4、作品名は《 》、書籍・雑誌・作品集などは『 』内に表記した。〔 〕内は執筆者補記を示す。
- 5、版種について、特に記載の無い作品は木版画とする。
- 6、頻出する参考文献については以下のように表記する。
 - ・加治幸子編著『創作版画誌の系譜』（中央公論美術出版 2008年）→『創作版画誌の系譜』
 - ・『エッチング』（日本エッチング研究所発行／臨川書店復刻版 1991年）→『エッチング』
- 7、執筆者

岩切信一郎（元新渡戸文化短期大学教授）	植野比佐見（和歌山県立近代美術館学芸員）
加治幸子（元東京都美術館図書室司書）	河野 実（鹿沼市立川上澄生美術館館長）
滝沢恭司（町田市立国際版画美術館学芸員）	西山純子（千葉市美術館学芸員）
三木哲夫（兵庫陶芸美術館館長）	武藤隼人（埼玉県立芸術総合高等学校美術科教諭）
森 登（学藝書院）	樋口良一（版画堂）

戦前に版画を制作した作家たち (24)

【み後半】

三橋 健(みはし・たけし) 1912～1977

1912(大正元)年11月11日岡山県都窪郡倉敷町(現・倉敷市)に生まれる。1931年岡山の関西中学校を卒業。1932年東京美術学校西洋画科に入学、藤島武二に師事する。1937年同校を卒業。在学中の1935年、同校に新設された臨時版画教室木版画部に所属し平塚運一の指導を受けた(但し作品は未見)。また、翌1936年に第6回独立展に油彩画《へうたん》が初入選、第7～9回展(1937～1939)まで同展に出品する。1939年、福沢一郎らが中心になって結成されたシュールレアリスムを看板に掲げる「美術文化協会」の創立会員に名を連ねるが、同年父の病状を理由に倉敷に帰省し、翌1940年4月の第1回展直前に同会を脱会する。その後は倉敷で大原農業研究所植物病理教室助手として勤務しながら画家として活動の続け、国画会展に出品する。1943年の第18回展、翌1944年の第19回展に入選し、戦後も同展に出品を続けた。1951年の第25回展出品の油彩画《コンポジションA》で国画奨学賞・教美賞を受賞。1955年絵画部の会員となる。この間、1945年大原美術館評議員として同館の美術収集に関わる。また、1952年より10年間岡山県展の審査員を務め、茶屋町中学校・倉敷天城高校・児島高校・倉敷青陵高校などで美術の指導にあたった。1976年倉敷市文化連盟賞受賞。1977(昭和52)年4月30日倉敷市で逝去。【文献】平塚運一『版画の国日本』(阿部出版 1993)／『倉敷市立美術館 所蔵目録』(1994)(樋口)

三村泰平(みむら・たいへい)

1935(昭和10)年学習院普通部3年に在学中、西田武雄主宰の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第36号(1935.10)に銅版画《普通部正門》を発表。これは三村にとって4～5枚目の大作であり、学習院専修科・高等科の岡常次教諭の指導による制作である。岡は学習院普通部において、エッチング制作を版画工作の授業で取り上げた。これは全国の中学校では初めてのことであった(「岡常次」の項参照)。また、三村は1936年の年賀状をエッチングで制作しており、それは『エッチング』第39号(1936.1)に掲載されている。【文献】『エッチング』13・21・36・65(加治)

三森龍次(みもり・りゅうじ) 1916～没年不詳

1916(大正5)年宇都宮市河原町に生まれる。1929年、栃木県立女子師範附属小学校卒業後、川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校(現・宇都宮高等学校)に入学。小学生の頃から絵を好み、水彩やクレヨンを用いて描いていた。中学校では絵画クラブ「パレット会」に所属し、大倉植三郎教諭から指導を受ける。当時、生徒が発行していた版画同人誌『刀』(1928～1932 全13号)に3年生から参加。第11輯(1931)に《風景》、第12輯(1931)に《風景》、第13輯(1932)に《風景》を発表するが、『刀』はそれ以降休刊となる。1934年に同校を卒業し、小樽高等商業学校に入学。1938年同校を卒業し、富士電気株式会社に勤務。中学校卒業後は版画や絵画の制作から離れたが、1985年頃からまた日本画の制作に取り組んだ。【文

献】『版画をつづる夢—宇都宮に刻まれた創作版画運動の軌跡—』展図録(宇都宮美術館 2000)／『創作版画誌の系譜』(加治)

宮 芳平(みや・よしへい) 1893～1971

1893(明治26)年6月5日新潟県北魚沼郡堀之内町に生まれる。1911年県立柏崎中学校を卒業。東京美術学校の受験に失敗し、太平洋画会研究所・白馬会洋画研究所に学ぶ。1913年東京美術学校西洋画科に入学。鱧利彦・保田龍門・曾宮一念らを知る。1914年8月の大正博覧会に《カーテンに》が入選。同年10月の第8回文展に《椿》を出品するも落選。理由を糺しに審査主任だった森鷗外を訪ねたことがきっかけで鷗外の知遇を得る。翌年、鷗外はこの時の宮を題材として短編『天龍』を『アルス』創刊号(1915.4)に発表する。この頃、山形市出身の駒谷エン(高村光太郎はエンをモデルに足首の彫刻を作ったといわれる)との同棲生活が原因で東京美術学校から退学勧告を受け、1916年中退。1918年プロテスタントの吉田清太郎牧師からエンとともに洗礼を受ける。同年、日本美術院洋画部の研究所に学び、彫刻部にいた中原悌二郎を知る。村山槐多・山崎省三らから刺激を受け、翌1919年同院のコンクールで甲賞を受賞(村山・山崎は乙賞)。その賞金で新潟県柏崎に住む従兄弟を訪ね逗留。同地で中学校の先輩洲崎義郎(中村彝の後援者、戦後柏崎市長となる)の世話で個展を開催し、請われて柏崎商業学校の嘱託として美術と習字を教えるが、妻エンの転地療養の必要から嘱託を辞し、1920年神奈川県平塚町に転居する。洲崎と中原の紹介で中村彝を訪ね師事。1923年外遊する清水多嘉示(後に彫刻家として知られる)の後任として中村彝・曾宮一念の薦めで長野県の諏訪高等女学校(1948年に諏訪二葉高校と改称)の美術講師として赴任(平野高等女学校・諏訪蚕糸学校の講師も兼任した)。戦後も諏訪二葉高校の嘱託として1958年退職するまで講師の身分のまま、絵を描き(1961年国画会絵画部会員)、詩を書きながら諏訪にとどまり続けた。この間、ガリ印刷による手作りの個人通信誌『AYUMI』を戦前と戦後に2度発行する。1933年12月1日から1939年9月7日まで21便(「前書」[まへがき]と呼ばれる。合計434頁)は、親戚・知人・教え子らに自身の消息や詩・随想などを綴ったもので、1934年西田武雄研究所製エッチングプレス機を購入し、附録(「版画篇」)として同好者にエッチング作品を頒つため、フォーゲラー調の《湖と乙女》《祈り》や《ハケ岳》《赤岳と阿弥陀》《硫黄岳》《自画像(眼を病める)》等の信州風景・自画像・静物などを1936年にかけて40点制作する(「私の製作したエッチング」『音信の代りに友に送る AYUMI』68頁)。その中の1点《裏山》が『エッチング』34号(1935.8)に図版で紹介され、1940年日本エッチング作家協会主催の第1回日本エッチング展覧会(12.10～13 銀座資生堂画廊)にも同作品を出品する(題名は《風景》)。また、1961年1月から1966年9月まで『AYUMI』40便(「後書」[あとがき]と呼ばれる。合計1075頁)は、退職後の1960年に知人・教え子らの浄財で住居兼アトリエを建ててもらった感謝の思いから、知人・教え子らに宛て書かれたもので、1便～7便(1961.1.1～1962.1.1)は思い出た断片、8便～40便(1962.2.10～1966.9.22)は自身の半生を綴った自伝的内容となっている。1965年銀座松坂屋で個展を開催。その売上で翌1966年聖地巡礼の旅に出、ローマ・エルサレムなどを巡って帰国。1970年『聖地巡礼』(胡桃書館)を

出版する。1971（昭和46）年3月30日京都市の病院で逝去。甥に歌人の宮村二がいる。【文献】『エッチング』19・34・54・96／宮晴夫編著『宮芳平画集』（信濃毎日新聞社1997）／宮芳平『音信代りに友に送る AYUMI』（野の花会・宮晴夫 1999）／宮芳平『宮芳平自伝』（求龍堂2010）／『没後40年路傍の聖者－宮芳平』展冊子（練馬区立美術館 2011）／『宮芳平画文集 野の花として生くる』（求龍堂 2013）（樋口）

宮井海平（みやい・かいへい）

北海道帝国大学農学部林学科に在籍し、1932年に同校を卒業。予科1年生の1925年6月、同じく予科学生の外山卯三郎を中心に相川正義（詩）・伊藤義輝や宮井など学生と教授の斉藤護国など、北大関係者8人で「札幌詩学協会」を結成し、詩・版画・演劇の同人誌『さとぼろ』（1925～1929 29冊）を創刊。宮井は第1号から創刊同人として参加するが創刊号には作品の発表はなく、第2号（1925.7）に《やまぶき》と「六号雑記」、第3号（1925.8）に《隈どり》と表紙絵・裏表紙絵・扉絵を、第6号（1925.11）に《人体》、第9号（1926.3）に表紙絵・裏表紙絵・扉絵を、第10号（1926.5）に詩を発表する。第3号、6号の表紙では抽象的でダイナミックな造形を示し、1920年代を象徴したグループ「マヴォ」の影響を感じることが出来る。その後の発表はなく、第29号（1929.9）に詩だけが発表されている。『さとぼろ』創刊の1925年には、札幌詩学協会が主催した「第1回版画展覧会」（10.25～27 札幌商業会議所）に《隈どり》《人体A》《人体B》《日向葵》の4点を出品する。当時、小樽新聞社（札幌支社）の記者であった唯是日出彦は「版画展印象」（「北海道の初期版画」）で宮井の作品について「わざとらしい」とあまりよい評価をしていない。『北大文芸』（1921～1941）に執筆。1928年桜星会文芸部委員。演劇や音楽の分野でも活躍したようだが、詳細は不明。【文献】今田敬一「北海道の初期版画」『北海道美術史』（北海道立美術館 1970）／『創作版画誌の系譜』／『さとぼろ』発見 展図録（北海道文学館 2016）（加治）

宮井とし子（みやい・としこ）

1937（昭和12）年北海道庁立岩見沢高等女学校4年に在学中、西田武雄主宰の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』の第61号（1937.11）に電信柱のある風景を描いた銅版画を発表。当時、岩見沢高等女学校にはエッチング教育に熱心な阿部新一教諭がおり、宮井も阿部の指導を受けたと考えられる。【文献】『エッチング』61（加治）

宮内富男（みやうち・とみお）

大分県師範学校の図画教師武藤完一は、1929年から毎年夏休みに学校主催の「夏期図画実技講習会」を開催する。1934年の第6回では日本エッチング研究所の西田武雄を講師に招き、エッチング講習会（8.1～5 参加者32名）を開催（『エッチング』22）。宮内は当時、大分県東郡安岐小学校に勤務しており、この講習会に参加。翌年も第7回夏期図画実技講習会として「創作版画講習会」（講師：平塚運一 8.1～5）が開催された。当時、武藤は版画同人誌『九州版画』（1933～1941 全24号）を主宰しており、その第8号（1935.10）は講習会記念号として発行され、講習会で制作された版画が掲載されている。宮内は《両子山遠望》を発表していることから、この講習会にも参加したと考えられる。その後、第9号（1936.1）に《牛の

ゐる風景》、第10号（1936.4）に《赤かぶら》を発表。それ以降も第15号と19号を除き21号（1940.6）まで木版画の発表を続けた。1940年当時の所属は大分県東国東富来校となっている。最終号の第24号（1941.12）の会員名簿には掲載されているものの、作品の発表はない。1937年には別府市教育委員会主催のエッチング講習会（講師：西田武雄 8.1～3 別府市北浜小学校 参加者28名）が開催されていて宮内も参加しているが、銅版画作品は未確認（『エッチング』58）。【文献】『エッチング』22・58／武藤隼人『版画家・武藤完一資料集（戦前篇Ⅰ）－作家年譜を中心にして－』（武藤隼人 2010）／『創作版画誌の系譜』（加治）

宮内秀雄（みやうち・ひでお）

西田武雄主宰の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第21号（1934.7）に静物を描いた銅版画が掲載されている。西田はエッチング普及のため、全国の小・中学校で教師や生徒を対象にしたエッチング講習会を開催。1934年6月23日には東京の下谷区金曾木小学校で下谷区図画手工主任の先生を集め、エッチング講習会（参加者9名）を開催している。当時、下谷区忍岡小学校の教員であった宮内も参加し、掲載作品はその時制作したものと思われる。なお、同誌第13号（1933.11）の「研究所製エッチングプレス所有者」に掲載されていることから、講習会受講以前にもエッチング制作を行っていたと考えられる。【文献】『エッチング』13・21（加治）

宮内陽三（みやうち・ようぞう）

1929（昭和4）年の第1回京都創作版画会展（2.1～5 京都・大丸）に《包装紙図案》《金魚草》〔題 未定〕3点を出品（いずれも版種不明）。【文献】岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『（京都府立総合）資料館紀要』12（1984）（樋口）

宮尾しげを（みやお・しげを）1902～1982

1902（明治35）年7月24日東京市浅草区新旅籠町に生まれる。本名は重男。蔵前の済美高等小学校を卒業。漫画家岡本一平に憧れ、1918年頃から師事する。1921年東京毎日新聞社に入社。翌年東京毎夕新聞社に移り、1923年から24年にかけて子ども向けの連続長編漫画「武者修行団子串助漫遊記」を連載したが、爆発的な人気を博し、1925年に講談社より刊行された単行書は100版以上を重ねるベストセラーになった。その後も『風来国』（草文社1926）、『漫画物語 軽飛軽助』（講談社1927）、『漫画西遊記』（婦女界社1928）、『今弁慶』（講談社1929）などの作品を次々と発表したが、次第に漫画から離れ、戦中から戦後にかけては浮世絵・江戸小咄・郷土芸能などを研究し、多数の著書を残した。版画は、木版画を手がけ、1928年の第8回日本創作版画協会展に《お・カルメン》《太夫》が入選し、『HANGA』第13輯（1928.3）に《カルメン》（図版）を発表。翌1929年も第9回日本創作版画協会展に《スキー地へ》が入選。また同年、旭正秀・野村俊彦・松村松次郎と『版画』（素描社）を創刊し、第1号（1929.2）に《太夫》《歌劇カルメン》、第2号（1929.9）に《夜汽車》、第3号（1929.12）に《助六（羽左エ門）》、第4号（1930.3）に《馬》、第5号（1930.5）に《白子島的女》を発表。1930年の『版画』同人第1回展（4.2～6 有楽町・朝日新聞社ギャラリー）にも《木曾路》《芭蕉堂》など13点を出品した。日本版画協会展へは、1931年の第

1 回展に《高知の五月》《半蔵門》、1936 年の第 5 回展に《助六由縁江戸桜》《福島旧道》が入選。その間、『白と黒』第 14 号 (1931.5) に《木曾福島》、第 16 号 (1931.7) に《文楽人形》、第 17 号 (1931.9) に《文楽人形》、第 18 号 (1931.10) に《文楽人形 (松王)》、第 20 号 (1932.1) に《たこたこ》、第 21 号 (1932.2) に《猿》、《版藝術》第 9 号「全日本版画家年賀状百人集」(1932.12) に《年賀状》を発表した。戦後は、1957 年の第 1 回東京国際版画ビエンナーレ展に《おしどりと漁師 沖繩舞踏より》、第 13 回日展に《阿波文楽》が入選。日展へはその後も出品を続けた。1960 年「日版会」に参加し、後に副会長。また、1962 年の「日本浮世絵協会」設立に参加し、理事を務めた。他にも文化財保護審議会専門委員・国立劇場専門委員・日本民謡協会顧問・日本芸能協会理事・日本歌謡学会理事など、数多くの役職を歴任。1969 年紫綬褒章、1974 年東京都文化賞などを受け、1975 年勲四等旭日小綬章を受章した。1982 (昭和 57) 年 10 月 2 日東京都豊島区北大塚で逝去。【文献】『『版画』同人第一回展覧会出品目録』(1930)／「宮尾しげを 理事略年譜」『浮世絵芸術』76 (1983.3)／「宮尾しげを」『日本美術年鑑』昭和 58 年版 (東京国立文化財研究所 1985)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『創作版画誌の系譜』(三木)

宮川春汀 (みやがわ・しゅんてい) 1873 ~ 1914

挿絵画家で特に明治大正期の少年少女、子供の風俗を描いた版画類に定評があった。明治 43 年 5 月『此花』(第五枝、雅俗文庫)での「現今浮世絵師」では「師門 富岡永洗／俗称 宮川守吉／年齢 三十八 (明治六年生)／生地 三河国渥美郡畠村 現福江町／現住 東京都芝区高輪南町五十二番地」と紹介されている。1873 (明治 6) 年 11 月 11 日、現在の愛知県田原市に生まれる。父 (土地の豪商渡辺家) 渡辺長治・母かつの第四子。1878 年に母方の絶家であった家を継ぎ、「宮川」姓を名乗る。1890 年、17 歳で上京し富岡永洗門下生となる。1892 年以来、『風俗画報』で活動。当初は「蓬齋宮川洗圭」と号し、のちに「春汀」に改めた。大判錦絵では 1896 年の『子供風俗』(滑稽堂秋山武右衛門版) シリーズ 24 枚、『こども遊』(松木平吉版) 横組 12 枚。1897 年の『風俗通』(福田初次郎版) 38 枚、『子供風俗画帖』(滑稽堂秋山武右衛門版) 折本及び『有喜世之華』39 枚。1898 年の『美人十二か月』(松木平吉版) 大判錦絵三枚 12 組、『男子立志鑑』折本、『当世風俗通』シリーズなどの錦絵作品で名声を挙げる。挿絵は『文藝倶楽部』をはじめ博文館系出版物で活躍。1897 年 4 月に松井於敬と結婚。晩年は、子供が不慮の事故で急死し、その精神的衝撃で病み、1914 (大正 3) 年 7 月 26 日病没。【文献】『挿絵画家宮川春汀：田山花袋記念館第 12 回特別展』図録 (館林市教育委員会文化振興課 1995)／山田奈々子『増補改訂 木版口絵総覧』(文生書院 2016)／岩切信一郎『宮川春汀』『浮世絵大辞典』(国際浮世絵学会編 東京堂出版 2008) (岩切)

水谷川忠麿 (みやがわ・ただまろ) 1902 ~ 1961

1902 (明治 35) 年 8 月 27 日東京府豊多摩郡に公爵近衛篤麿の四男として生まれる。兄に近衛文麿 (内閣総理大臣)、秀麿 (指揮者)、近麿 (ホルン奏者) がいる。男爵水谷川忠起の養子となり水谷川姓となる。学習院中等科時代から有島生馬に洋画を学ぶ。1923 年京都帝国大学文学部に入学。大学時代はオーボエ奏者として同大オーケ

ストラに参加。また津田青楓塾に通い、1928 年の第 15 回二科展に《パレットを持つ女》が初入選。以降第 16・17 回展と連続して入選。その他、第 10 回中央美術展 (1929)、第 2 回聖徳太子奉讃美術展 (1930) にも出品する。また、雑誌『まんだら』『クロッキー』『草人木』『擇草』などの編集に携わり (いずれも未見)、『霊山美術』(第 1 号のみ確認 霊山美術社 1927.6 津田青楓塾がある洛東霊山町に因んで命名) を刊行する。多芸多才で、「紫山」の号で書画や作陶、昭和初頃には《葡萄》《枇杷》などの木版画も制作している。1928 年東京に移住し、華道御門流の再興を手掛け、戦前は内務大臣秘書官・大蔵大臣秘書官・貴族院議員など、戦後は春日大社・談山神社宮司、華道御門流家元などを歴任した。1961 (昭和 36) 年 5 月 20 日奈良市で逝去。【文献】『特別展 京都の近代版画』展図録 (京都市美術館 1996)／『浅井忠と関西美術院展』図録 (府中市美術館・京都市美術館 2006) (樋口)

宮川文雄 (みやがわ・ふみお)

日本各地の版画同人誌に作品を発表していた長野県須坂の眼科医小林朝治は、1933 (昭和 8) 年の夏、平塚運一を講師に招いて「版画及び図画講習会」(須坂小学校) を開催した。それを契機に「信濃創作版画研究会」(1936 年「信濃創作版画協会」となる) を立ち上げ、1933 年 8 月に版画同人誌『櫟』(1933 ~ 1937 全 13 輯 戦後復刊) を創刊した。その第 4 輯 (1934.11) に《秋》を発表。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録 2 版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集」』(須坂版画美術館 1999)／『創作版画誌の系譜』(加治)

三宅草生 (みやけ・そうせい)

1928 (昭和 3) 年のアトリエ社主催第 15 回誌上展覧会で三宅の木版画《習作》が三等に入選し、『アトリエ』第 5 巻 10 号 (1928.10) に図版と共に、選者山本鼎の選評「印象は石版画のやうである、それは彫りに特長がよ〔な〕く、水絵の具ので摺つてある為と思ふ。つまり、水彩画を複製したやうな生温さがいけないのである。バックの白ぬきはまづい、ばれん扱ひはなかなかうまいですな」が掲載されている。当時、飯田町大橋新樹寮に在住。その翌年には中島重太郎主宰の版画誌『版画 CLUB』第 1 巻 4 号 (創作版画倶楽部 1929.8) の応募作品紹介で《牛ヶ淵》が入選。前川千帆は「濠、堤など要領よく表現してあります。木の枝、火の見櫓も上等です。だが余りに器用に楽に出来てゐるだけに、何となく物足りなさを感じます」と評を記している。また同誌第 3 巻 5 号 (1931.12) には「風景版画展雑記 大橋図書館にて」を寄稿。第 4 巻 2 号 (1932.2) には創作版画倶楽部主催「創作版画賀状展覧会」(会場：神田・文房堂) の出品作品を第 1 回誌上展として掲載しているが、そこに三宅の賀状 (『そうせい』のサインあり) が紹介されている。【文献】『アトリエ』5-10／『版画 LUB』1・4・3・5・4・2／『創作版画誌の系譜』(加治)

三宅風白 (みやけ・こうはく) 1893 ~ 1957

日本画家で挿絵画家としても知られた。1893 (明治 26) 年 5 月 2 日京都市に生まれる。父は日本画家三宅呉暁。本名清一、当初の雅号は呉月。1912 年京都市立美術工芸学校絵画科に入学。1915 年同校を卒業し、研究科に進学。同年「密栗会」結成に参加するも、陸軍へ志願入隊。1918 年第 12 回文展に《演習所見》が初入選。その後、1925 年の第 6 回帝展に《おはらめ》で入選し、以後

帝展入選が続く。1926年からは山元春挙に師事し、「早苗会」で研鑽。1930年第11回帝展出品の《花旦》で特選となる。1936年から市立絵画専門学校助教授となり、戦後の1949年まで教員。日展でも1950年の第6回展に《くさむら》、翌年の第7回展に《薪能》を依囑出品。版画は、1936年5月から38年にかけて芸艸堂から刊行の『風白歌舞伎絵』木版画全30葉（毎回5葉宛の6回頒布 全6輯36円）がある。挿絵画家としては、『演芸画報』『キング』『毎日グラフ』『サンデー毎日』『週刊朝日』などでの主に戦前昭和期の活動が知られる。1957（昭和32）年2月26日京都市中京区の自宅で逝去。【文献】『20世紀物故日本画家事典』（美術年鑑社 1998）（岩切）

三宅克己（みやけ・こっき）1874～1954

水彩画に本領を発揮し、水彩画普及に貢献。水彩画のタッチを再現した多くの石版画風景絵葉書（雑誌添付絵葉書も含む）を制作・担当し好評であった。1874（明治7）年1月8日徳島市下助任町に生まれる。1880年6歳の時、父盈衛（みつえい）が蜂須賀家養育係となり母なみに伴われて上京。日本橋区浜町に住み久松小学校、のち転居で高輪の御田小学校へ移る。1888年明治学院普通学部で一級上の和田英作と知り合う。1890年に大野幸彦画塾に入り、1892年には原田直次郎の鍾美館に移る。同年第4回明治美術会展に出品。1897年渡米し、イェール大学付属美術学校に学び、さらに欧州へ渡り1898年に帰国。1899年に第4回白馬会展に《米国ニューヘブンの雪景》など欧米滞在作の水彩画43点を出品。翌年の第5回展にも28点を出品、以来白馬会に出品。この間には、島崎藤村の勧めで小諸義塾の図画教師を務めた。1901年から02年に再渡欧。1903年第5回内国勸業博覧会に石版画《大阪城》（東京印刷）出品。1907年東京勸業博覧会に出品の《雲》《森の道》が2等賞。1908年第2回文展出品の《初冬》、1909年第3回文展出品の《湯ヶ島》が3等賞受賞。1910年から1911年にかけて3度目の渡欧。1912年には「光風会」創立に参加し、終生出品常連であった。また、1915年第9回文展出品の《冬の小川》が2等賞を受賞。無鑑査となり、文展・帝展・新文展・日展にも常連として出品した。一方、『明星』『光風』などの雑誌の挿絵を担当。また博文館の『女学世界』『中学世界』『文章世界』などの石版画風景の口絵・とじ込み石版風景絵葉書には少青年層のファンが多く、絵葉書ブームの渦中の画家のひとりであった。1951年第1回日本芸術院賞恩賜賞受賞。1954（昭和29）年6月30日神奈川県真鶴町で逝去。自伝『思ひ出つるまゝ』（光人社 1938）があり、他に『描法解説水彩新画帖』第1輯（誠進堂 1905）、『水彩画手引』（精美堂 1905）、『水彩画指南』（日本葉書会 1907）、『欧州絵行脚』（画報社 1911）、『写真のうつし方』（阿蘭陀書房 1916）、『欧州写真の旅』（アルス 1921）など、水彩画や写真に関する指導書が多い。【文献】『三宅克己回顧展』図録（徳島県立近代美術館 2014）（岩切）

三宅定雄（みやけ・さだお）

1931（昭和6）年の第4回プロレタリア美術大展覧会に版画《対策》を出品。【文献】岡本唐貴・松山文雄編『日本プロレタリア美術史』（造型社 1967）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）（三木）

三宅清七（みやけ・せいしち）

明治期に発行された石版印刷業界誌『虹』第3巻2号（1910.2）石版画表紙絵の図案製版を担当している。現在、『虹』は第1巻1号（1908.2）～第3巻6号（1910.6）のうち17号分が確認されている。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

都彦二（みやこ・ひこじ）

大分県師範学校の図画教師武藤完一は、1929（昭和4）年から毎年夏休みに夏期図画実技講習会を開催。1931年8月には「版画教育講習会」（講師：平塚運一 大分県師範学校）として開催され、大分県北海部郡佐志生校に勤務（『彫りと摺り』2、『空巢』4）していた都彦二（本名は宇都宮吉彦）も参加し、版画制作を始めた。主宰した武藤はこの講習会を機に版画同人誌『彫りと摺り』（1931～1933 全8号）を創刊。その第1号（1931.9）に《万年青》、第2号（1931.11）に《七夕》、第4号（1932.6）に《チューリップ》を「宇都宮吉彦」の名で発表。その後、第5号（1932）に《自画像》、第6号（1932.12）に《ほし柿》、第7号（1933.3）に《将棋》、第8号（1933.6）に《二人の男》を「都彦二」の名で発表した。一方、この講習会に中津市から参加した宇都宮（都）を含めた同宿の者10人が親睦と技術の向上のため、地元で版画同人誌『空巢』（1931～1932）を創刊。その第1号（1931）に《習作》、第2号（1931.12）に《愚感》を「宇都宮吉彦」名で、第3号（1932.9）に《風景》《朝の海》、第4号〔昭和7年師走版〕（1932）の《串柿》と表紙絵を「都彦二」名で発表。「宇都宮吉彦」名で『空巢』第2号（1931.12）に発表した《愚感》と「都彦二」名で『彫りと摺り』第7号（1933.3）に発表した《将棋》が同じ絵柄であり、「Y.U.」のサインがあるため、同一人と判断した。1932年6月までは「宇都宮吉彦」を、それ以降は「都彦二」を使用している。なお、『彫りと摺り』の改題誌『九州版画』第2号（1934.1）の《桃太郎の犬〔賀状〕》と青森で発行された『陸奥駒』第16集（1934.12）の〔賀状〕が同じ絵柄であり、双方とも「宇都宮吉彦」の名を使用し、1934年であることから、宇都宮吉彦を本名と推測した。【文献】『創作版画講習会』『郷土図画』1～5（大分美育研究会 1931.10）／池田隆代「大分県における創作版画誌」（『大分県立芸術会館研究紀要』1 2002）／『創作版画誌の系譜』（加治）

*注：「宇都宮吉彦」の項にはその時点で「都彦二」と同一人として判断できなかったため、「都彦二」については記していない。

宮崎武夫（みやざき・たけお）

旧姓は中津留。1922（大正11）年東京美術学校図画師範科に入学。1925年同校を卒業し、滋賀県の神崎商業学校に勤務。その後、宮崎姓となる。1931年の第6回燦木社展（5.26～29 上野・松坂屋）に日本画を出品。続く第1回新興版画会展（6.21～25 新宿・三越、大分出張展：8.5～6 大分・丸吉呉服店）に木版画《芙蓉花》《童女》《木蓮花》《雛鶏》が入選し、「宮崎武夫氏 初めて見る人だが芙蓉花は結構な作で、すきになれる。雛鳥も面白いが足に難がある一然し親しめる絵である」（きつつき会会員「新興版画第一回展覧会批評」『版画 CLUB』3～1）と評された。また、9月の第1回日本版画協会展にも木版画《カンナ》が入選した。翌1932年には『版画 CLUB』の「第1回紙上展」に《金箋花》2点を応募。同誌第4年第3号（1932.4）に作品図版が掲載され、選者の恩地孝四

郎は「金箋花」の作者は同題（同姿態）異図を二図送られた。二つ送つて来られた所が愉快だ。そして、その一つのモチーフ〔モチーフ〕を繰返し追求してゐる点はいゝことだと思ふ。うち掲出のものは他の一回〔点〕とは断然優れてゐる。感じ方が直截端的で表現も遅疑がない。流露たるしかも確然たる出来だ。多少の贅線を、無反省な死線を加へてゐるが、その欠点は全倒されてゐて小さい欠点でしかない」（『紙上展内見の記』『版画 CLUB』4-3）と評している。その後、1937年の『エッチング』第51号（1937.1）に「年頭所感」を發表。この頃は、滋賀県立八幡商業学校に勤務か、同校では図画と書道を担当。また、1941年の『エッチング』第97号（1941.1）所収の「エッチング研究所製プレッス所有者」に名前があり、銅版画も試みていたようである。1943年日本版画奉公会会員。戦後の活動は不明であるが、1972年頃は、大分県大分市舞鶴町に住む。【文献】『第一回新興版画会出品目録』（1931）／『版画 CLUB』3-1・4-3（1931.8・1932.4）／『エッチング』51・97・124／『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三卷』（ぎょうせい 1997）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／『同窓生名簿 東京美術学校 東京芸術大学美術学部 東京芸術大学大学院美術研究科 昭和47年版』（1972.12）（三木）

宮崎 豊（みやざき・ゆたか）

1924（大正13）年東京美術学校図画師範科に入学。在学中、1925年の第2回白日会展に油彩画《郊外風景》が入選。翌1926年も第13回光風会展に油彩画《梅の木》、第3回白日会展に油彩画《ブランコ》が入選した。1927年同校を卒業し、宮崎県師範学校に勤務。木版画を始めた経緯は不明だが、1928年の第8回日本創作版画協会展に《造船所》、翌年の第9回展に《風景》が入選。また、1929年の『風』再刊第3号（6.15）に《雨》を發表した。その後、1936年の昭和11年文展鑑査展に油彩画《田園の女達》が入選（ただし、出品時の在住地は茨城とある）。以後の活動は不明であるが、1972年頃は、大分県大分市長浜町に住む。【文献】『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三卷』（ぎょうせい 1997）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／『同窓生名簿 東京美術学校 東京芸術大学美術学部 東京芸術大学大学院美術研究科 昭和47年版』（1972.12）／『創作版画誌の系譜』（三木）

宮崎与平（みやざき・よへい） ➡ 渡辺与平（わたなべ・よへい）

宮地嘉六（みやじ（ち）・かろく） 1884～1958

1884（明治17）年6月11日佐賀県佐賀に生まれる。小学校を中退し、仕立屋の小僧を始め佐世保海軍造船工廠の職工や呉海軍工廠の旋盤工など転々とする中で文学に目覚め、文学を学ぶために19歳で上京。富岡鉄工所や石川島造船所等で働くが、1年余で東京での生活を断念する。徴兵を経て1905年除隊後は呉海軍工廠第九工場に入る。この頃、及川鼎寿・相坂信と出会い、社会主義思想に共鳴、「宮地弾丸」の筆名で短編「船小屋硯」「雲雀」などを『呉毎日新聞』に投稿する。その後、再度の上京を挟んで再び呉海軍工廠に働き、1912年3月呉海軍工廠造兵部職工のストライキに第九工場の代表として参加、検挙され広島監獄に拘禁される。同年9月明治天皇崩御の大赦令で

放免となり、1913年3度目の上京で町工場に職を求めるが、当局の監視が厳しく、職工生活を諦め、相坂信を売文社に訪ね、堺利彦に会い、堺の紹介で筆耕の仕事に就く。その後廿世紀社や新公論社などの出版社に働きながら作家活動に入る。1918年『煤煙の臭ひ』で注目され、『放浪者富蔵』『ある職工の手記』などを発表、大正期における労働文学の書き手として知られるようになるが、2度の離婚と2児を抱える困窮の中で、『累』などの私小説風の作品へと変じ、次第に忘れられた作家（「非流行作家」）となる。こうした時流への抗いから、1932年頃に自費出版（凡六荘出版部）による『新選嘉六小説集』を企画。第1集は6篇の短編を集めたユーモア集で、表紙は自身の手書き、手摺の版画を附録として添え、「街頭へ進出し廉価にて奉仕的に売り出す計画」も試みは続かず第1集のみで終わってしまう。1943年『文学報国新聞』の編集員として日本文学報国会（麹町区永田町）の嘱託となり、終戦後も日本文学報国会事務局焼け跡で壕舎生活を営み、篆刻で生計を立てながら小説を書き続けた。1952年『中央公論』第67年第3号（1952.3）に發表した小説「老残」で再び注目され、1956年壕舎生活を離れ北区王子本町の都営住宅に移り住む。1958（昭和33）年4月10日東京都豊島区池袋の病院で逝去。

宮地は版画に就いて、「小説を書くことを本業としてゐる私などが、今時分から、本格で絵をかくことを勉強しても、それは無謀だと思ふので、私は好きのまゝに無茶苦茶にたゞ情景を写生して板面に彫りつける。とてもそれは面白い遊戯の一つとして私には当分やめられさうもない。本紙〔国民新聞〕に御紹介に預かった版画がそれである」、と「余技としての版画」一・二・三（『国民新聞』1933.4.23～25）に記す。『国民新聞』に掲載された版画は未確認だが、小野忠重は「職場の片隅で」（『近代日本の版画』三彩社 1971）で、「街中の熱っぽい版画家の一人」として宮地をとりあげ、「宮地嘉六版画集」とある四点の木版画、（中略）都市の郊外らしい三点のうち、坂道にそう家並と橋をみせた一点は、思いきりかんたんな線で空間がひろがり、わずかな暗部がみごとに抑揚を与える美しい墨刷である。も一つ、これだけは「石川島」と題を入れた造船所風景は、窓のくりかえしやクレーンのわずらわしさと、まじめにとりくみ、水の投影の動きを美しくのこしている」と評し、木版「石川島」を図版で紹介する。小野が語る都市の郊外らしい3点の内の1点か、料治熊太主宰の『白と黒』第15号（1931.6）に木版「坂」の掲載がある。料治は「私の近所に住む小説家の宮地嘉六が、自作の版画をつくって私の家へ持って来て、見てくれといったのもその頃だった。（中略）宮地嘉六は、よく寸借という言葉で、借金を申し込むことがあった。その頃の彼は奥さんに逃げられ、子供二人をかかえて困っている時代だったから、くらしも大変だったのであろう」と回想する。宮地は版画のほかにも『白と黒』第10・14号（1931.1・5）、『版藝術』第3号（1932.6）、第3次『白と黒』第1～4号（1937.3～6）に「小閑隨筆」「春閑隨筆」「麗春隨筆」「梅花礼賛」「春風春水鈔」「石臼を恋する男」の隨筆6篇と小説「自他紙ひとへ」を寄稿している。【文献】小野忠重『近代日本の版画』（三彩社 1971）／料治熊太「哀亡に傾く世相」「鬼才の画人 谷中安規」（アポロン社 1972）／『宮地嘉六著作集』全6巻 慶友社 1985／『創作版画誌の系譜』（樋口）

宮地 茂（みやじ・しげる）

高知県の生まれか？（本籍地は高知県）。1911（明治44）年東京美術学校予備科西洋画科志望に入学。1913年第2回光風会展に油彩画《静物》を出品。1916（大正5）年春頃に、当時製版科主任教授結城林蔵と助教伊東亮次による西洋画科在学生のためのエッチング講義が1学期間あり、清水良雄・鈴木保徳・中村研一・吉澤廉三郎らとともに宮地も聴講実習している。1916年同校を卒業。1918年頃の住所は芝区白金三光町1-17。1928年8月に多田北鳥・大橋月皎ら図案家14名と印刷技術者19名によって結成された商業美術関係者の団体「実用版画美術協会」に図案家の一員として参加。同協会は、1929年12月の第1回展から1936年3月頃開催の「創作雛乃試作展」まで小規模展を含めて16回の展覧会を開催するほか、小冊子『実用版画美術』の発行、広告美術の講習会の開催、広告劇の上演などを実施しているが、宮地の版画作品は未確認。【文献】『美術新論』5-1（美術新論社 1929.12）／草光信成「回顧」『エッチング』42（1936.4）／『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第二巻』（ぎょうせい 1992）／滝沢恭司「多田北鳥」『近代日本版画家名覧』13（『版画堂』目録113 2016.9）（樋口）

宮下貞之助（みやした・さだのすけ）

1924（大正13）年の『詩と版画』第5輯（詩と版画社 1924.6）の「投稿版画に就いて」欄に、宮下の木版画《雨の堀端》に対する平塚運一の作品評が掲載されている。「雨だと云っても空が餘りに黒すぎる。刀の跡が少しうるさい感がある。（中略）墨と薄墨の二度摺にしたら面白かつたらうと思ふ」。図版は未掲載。【文献】『詩と版画』5（詩と版画社 1924.6）（樋口）

宮下岑雄（みやした・みねお）

1941（昭和16）年の第10回日本版画協会展に石版画《待機》《掃蕩戦》、翌1942年の第11回展に石版画《馬二頭》を出品。出品時は神奈川に住む。1944年会友に推挙された。【文献】『日本版画協会々報』37（1944.9）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）（三木）

宮田三郎（みやた・さぶろう）1924～2013

1924（大正13）年長野県北安曇郡美麻村（現・大町市）に生まれる。長野県師範学校一部2年に在学中、同校生徒による版画同人誌『樹水』（1938～1941 4冊確認）の第3号（1940～1941？）に《雲上殿》を発表する。1945年9月に同校を卒業し、小学校に勤務するが病気により休職後退職。次兄の詩集『可憐なきみに』の表紙と挿画（6枚）を多色刷り木版画で制作（未見）。1950年から52年にかけて松本市に移り、実兄のクレヨン会社を手伝いながら地方展に出品し、個展も開催する。1952年に上京。次兄の美術教材会社を手伝いながら一水会展や日本水彩展、日展などに油絵や水彩画、版画を出品。同時に「東京版画研究所」を創設し、主宰する。この頃より教育版画材料の考案・開発・普及に力を注ぎ、1957年には版画教材エッチングボード（紙によるドライポイント材）や版画板（カラーボード）を考案。世界の美術教育会議において紹介され、今日の凹版画教育と新しい美術教育普及の基を築いた。1959年に発病、1962年には研究所・アトリエ・自宅の全焼などで作品制作を断念したが、1967年にオリジナル版画作品集『日本の風景』全12集の制作

を決意し、その年に「第1集 染色版画九州篇」（この集のみ布に染色）をはじめとして、1980年に「第12集 木版画東海道篇」を制作し、シリーズを完成させた。その後、版画集『宮田三郎木版画全集』（東京版画研究所 1983～84）全5巻を上梓。この中で、美術評論家嘉門安雄は「線ではなく面で描き、影のない絵は平明であり、単純である。だが、見事なボリュームであり、豊かな詩情であり、その詩情には感傷がない。決して新しくない。だが、新鮮である」（第1巻）と宮田の作品を評している。戦後は短歌を始め、『ときどき 自選句集』（東京版画研究所 1993）などを上梓。1984年に紺綬褒章受章。2006年には長野県佐久穂町名誉町民となるが、2013（平成25）年11月20日逝去。2017年佐久穂町公民館で「第29回宮田三郎木版画展」（3.23～4.9）が開催された。【文献】『樹水』3／『卒業生名簿 昭和25年』（信州大学教育学部本校 1950）／「宮田三郎略歴」『宮田三郎木版画全集』1（東京版画研究所 1983）（加治）

宮田豊郎（みやた・とよろう）

1935（昭和10）年の第1回新興美術家協会展（10.1～20 東京府美術館）に木版画《タコを上げる》が入選。出品時は新潟に住む。【文献】『昭和十年度 新興美術家協会出品目録』（1935）（三木）

宮田弥太郎（みやた・やたろう）1906～1968

晴光あるいは青畝と号した日本画家。1906（明治39）年東京に生まれ、翌年台湾へ渡る。台北で1924年5月に西川満を知り、同年文芸雑誌『桜草』を、1926年に歌誌『洎芙藍（サフラン）』を創刊。中学卒業後西川を追って上京、日本画を修業。西川の帰台とともに台湾に戻り、台湾総督府文教局で教科書の挿絵を描く。1930年2月東洋画の団体「梅檀社」に参加。1934年、西川が創刊した美術文芸誌『媽祖』への参加を機に木版画を始める。翌年2月に「台湾版画倶楽部」を、5月に「台湾創作版画会」を設立、西川が勤めていた台湾日日新報社で会員の作品展や台湾の民俗版画展を開催した。1938年の通巻16冊まで続いた『媽祖』に多くの木版画を寄せたほか、西川の著作『媽祖祭』1935／『猫寺』1936、『亞片』1937／『絵本桃太郎』1938／『嘉定屠城紀略』1939／『カタコトの歌』1939／『台湾風土記』1940／『赤嵌記』1940／『浪曼』1941／『西遊記』1942／『延平郡王の歌』1943）や西川が編んだ雑誌やアンソロジー（『愛書』／『文芸台湾』／『台湾文学集』1942／『台湾絵本』1943）の装幀や挿画を手がけ、西川の台湾における創作活動を、立石鐵臣とともに美術面から支えた。西川の蔵書票も数多く手がけている。また、西川の著作以外でも、西川が刊行した平田禿木著『神曲余韻』（1937）や島田謹二訳『のって・ぐえねあな』（1938）に装画を残している。1944年台湾美術奉公会に参加、同年応召。戦後の1947年、西川を追って本土へ帰り、引揚寮で西川の詩集『柿の歌栗の歌』の装画に着手するも、病がちとなって次第に制作から遠ざかる。1968（昭和43）年5月6日東京にて逝去。『柿の歌栗の歌』の上梓は没後の1973年であった。後年西川は、台湾時代のかげがえのない相棒だった宮田の仕事へのしるし、1997年に『華麗島慕情：宮田弥太郎版画集』を刊行している。【文献】西川満「弥太郎登場 追憶のアルバム」・宮田金弥「亡兄回想」・西川満「浪曼 わたしの造った限定本②」『アンドロメダ』67（1975.3）／『台湾近代美術大事年表』（雄獅図書 1998）／中島利郎編「西川満著作年譜（戦前）」『日

本統治期台湾文学 日本人作家作品集』2〔西川満 Ⅱ〕(緑蔭書房 1998)／西山純子『華麗島の創作版画—1930年代・台湾—』『千葉市美術館研究紀要 彩蓮』7 (2004.3)／『麗しき故郷「台湾」に捧ぐ—立石鐵臣展』図録(府中市美術館 2016)(西山)

宮本三郎(みやもと・さぶろう) 1905～1974

1905(明治38)年5月23日石川県能美郡御幸村(現・小松市)に生まれる。1918年県立小松中学に入学。1920年同校を中退し、画家を目指して上京。川端画学校に入学し、藤島武二の指導を受ける。1923年光風会展及び中央美術展に入選する。関東大震災により京都に移り、黒田重太郎の指導を受ける。翌年橋本徹郎及び小松均と「東山美術研究所」を設立する。1926年再度上京。1927年第14回二科展に入選し、以後1944年まで出品。1936年会員となる。1938年10月から渡仏するが翌年避難船鹿島丸で帰国する。太平洋戦争中は陸軍報道班員となり、『セレベスの落下傘部隊の激戦』や『山下・パーシバル両司令官会見図』等の戦争画を多数描いている。1947年二科会を離れ、「二紀会」の創立に参加し、亡くなるまで中心メンバーとして活躍する。その間、1953年多摩美術大学教授、1958年日本美術家連盟初代理事長はじめ芸術文化関係の委員を数多く務める。1974(昭和49)年10月13日東京で逝去。版画の制作は、小磯良平・中川一政・木村莊八ら10作家と競作で『昭和錦絵 美人十粧』(高見澤木版社 刊年不詳〔1933頃か〕)に『読書する女性』(仮)を制作。戦後は原画をもとにして作られたと思われる木版画『舞妓シリーズ』(12点 1972)や明治書房・守屋寿夫の依頼で制作した『セルクル・ド・ラ・グラビュール・デュ・ジャポン(日本版画の会)』第1期(猪熊弦一郎・脇田和ら12作家 女屋勘左衛門刷)にリトグラフ『裸婦』などが知られる。【文献】『高見澤木版画社版画目録』(1939.11)／『物故者 宮本三郎』『日本美術年鑑』昭和49・50年版(東京国立文化財研究所 1976)／『近代日本版画大系 第三卷』(毎日新聞社 1976)／『京都古書組合連合目録』(2007.11)(森)

宮本萬吉(みやもと・まんきち)

1928(昭和3)年、山本鼎選による第15回『『アトリエ』誌上〔版画〕展覧会』(1928.10)で、宮本の『燈下讀書』が佳作に選ばれる。当時、埼玉県に在住。【文献】『アトリエ』5-10(1928.10)(樋口)

三代澤本壽(みよさわ・もとじゅ) 1909～2002

1909(明治42)年4月15日長野県松本市埋橋に生まれる。1927年松本商業高校を卒業。1935年静岡市で染料店を営む長姉夫婦のもとに移り、染物教室を手伝うとともに、直ぐ裏手に住んでいた小川龍彦と交友。また、同年秋の第1回静岡県美術協会展(11.20～24 静岡市公会堂)に出品されていた芹沢銈介の染色作品に出会い、感銘を受ける。その後、東京にいた芹沢に師事し、本格的に染色の道を歩み始めたが、1939年には日本民藝館で柳宗悦とも出会い、民藝運動に深くかかわるようになった。1941年から芹沢の指導により雑誌『工藝』の表紙づくりに携わり、第110号(1942.7)の表紙を和紙への型絵染で制作。その後も第112号(1942.12)・第113号(1943.7)・第114号(1943.12)を担当した。その間、1942年の第13回童土社版画展(11.7～10 静岡・吉見書店画廊)に版画『習作』2点を出品しているが、型絵染による作品だっ

たかもしれない。また、1943年の日本民藝協会静岡支部の発足に尽力し、役員を務めた。1945年松本へ帰郷。戦後は小学校の同級生だった丸山太郎らと同地の民藝運動を牽引し、1946年の日本民藝協会長野県支部発足に尽力する一方、再び雑誌『工藝』の表紙づくりに着手し、第115号(1946.12)・第119号(1948.7)を担当。このうち、第115号は「三代澤の特集号」とでも呼べるもので、装幀を担当した他、小間絵・染色和紙実物貼込(10点)を発表し、三代澤の文「染紙のこと」、柳の「三代澤君のこと」が掲載された。また、第117号(1947.9)には小間絵を発表した。1947年から国画会に出品するようになり、同年の第21回展に初入選し、工芸部会友に推挙された。その後、1949年に工芸部会員となり、1993年の第67回展まで出品(但し、第31・37・39・40・41・46・47・55・62・66回展は未出品)。1995年に退会したが、出品作品にはパネル張りや屏風仕立ての大作が多く、強制紙に型絵染を施した独自の作品世界は高く評価されている。2002(平成14)年11月26日長野県松本市で逝去。【文献】武藤美紀編「三代澤本壽略年表」『型絵染 三代澤本壽 生誕101年展』図録(松本市美術館 2010)／『民藝』688(「特集 三代澤本寿の仕事」2010.4)／『第十三回童土社版画展覧会』目録(1942)(三木)

三輪 伸(みわ・しん)

1930(昭和5)年、静岡中学を卒業した栗山茂が卒業記念に近所の幼馴染や版画仲間と版画同人誌『艸笛』を発行。その第3号(1930.8)に木版画『工場』と詩「一人ぼっち」を発表する。同年10月に開催された第2回童土社絵画展覧会(11～13 静岡市・田中屋襦衣店)に『ふるさとの風景』を2点、『お人形』『朝の風景』『小さい工場』『ごくろ』『寒日』『鮎』の全8点を出品するが、その後の消息は不明。【文献】『静岡の創作版画 昭和戦前・版画家たちの青春』展図録(静岡県立美術館 1991)／『創作版画誌の系譜』(加治)

三輪晃勢(みわ・ちやうせい) 1901～1983

1901(明治34)年4月30日新潟県三島郡与板町(現・長岡市)に生まれる。本名は信郎。田村宗立に学んだ父大次郎(号・越龍)の影響を受け、尋常小学校を卒業後京都に出る。1915年京都市立美術工芸学校予科に、17年同校絵画科へ入学。卒業後の1921年京都市立絵画専門学校に入学し、堂本印象に学ぶ。1924年同校を卒業。1927年の第8回帝展に『東山』が初入選。1931年第12回帝展で『春丘』、1934年第15回帝展で『舟造る砂丘』が特選となる。その間、1931年には印象の妹ミツと結婚し、翌年には雅号を「超世」から「晃勢」と改めている。印象の画塾「東丘社」の中心的存在として、東丘展にも出品。印象歿後は東丘社を主宰している。太平洋戦争中は、海軍報道班員としてフィリピン・ジャワなどを巡り『キャビテ軍港攻撃』などの戦争画を描いている。戦後は日展を中心に作画活動を行い、代表的な作品に『有明』(1947)『木屋町』(1956)『朱柱』(1962)『朝の雪』(1975)などがある。一方、松村梢風・長谷川伸・船橋聖一・海音寺潮五郎といった小説家の新聞・雑誌連載の挿絵を多数手掛けている。版画では1931年から33年にかけて刊行された京都の日本画家たちの原画による『新進花鳥画集』(マリア画房 全36点)に『アザミ』の多色刷木版がある。1979年日本芸術院会員。1983(昭和58)年9月7日京都市で逝去。【文献】『物故者 三輪晃勢』『日本美術年鑑』

【む】

武者小路実篤（むしゃこうじ・さねあつ）1885～1976

1885（明治 18）年東京・麹町（現・千代田区麹町一番町）で、藤原北家の支流の公卿・子爵武者小路実世の八子に生まれる。1906 年学習院高等科を卒業後、東京帝国大学社会科学に入学するが、翌年退学。志賀直哉・木下利玄等と「十四日会」を結成し、文学活動を始める。1910 年には有島武郎・里見弴・柳宗悦・児島喜久雄・有島生馬ら学習院同窓生を加え、雑誌『白樺』を創刊する。『白樺』は旺盛な文学活動の合間にクリンガーやロダン、後期印象派を紹介している。また里見や児島はバーナード・リーチに銅版を学び、自ら制作している。武者小路も岸田劉生と親交が深く、武者小路の刊行物の装幀や挿図の多くを岸田が描いている。1918 年「新しき村」を建設し、1923 年頃から作画を始める。1927 年第 1 回新しき村展を開催（新宿・紀伊國屋）、1929 年第 4 回国画会に油絵《千家元麿氏肖像》他 2 点を出品し、1935 年には国画会絵画部の会友となる。1931 年には室内社で油絵個展を開催。その傍ら箴言を書き加えた淡彩墨画を能くし、戦後にその複製画が多数つくられている。1934 年には加藤版画研究所から『版画集（根花実集）』（6 枚組、多色木版）を刊行。同所の『あんない』に「武者小路氏の描かれる処 虚心坦懐 既成画家の追従を宥さぬ高雅な稚拙味を 私に謳歌する」と記される。その内の 1 点と思われる《バラ》が「版奉供出版画作品」（『日本版画（エッチング）』128 1943.9）として加藤版画店より出品されている。1951 年文化勲章受章。1976（昭和 51）年 4 月 9 日東京・狛江の病院で逝去。【参考文献】「物故者 武者小路実篤」『日本美術年鑑』昭和 52 年版（東京国立文化財研究所 1979）／『加藤版画研究所四十余年作品の歩み』（加藤版画研究所 1974）（森）

武藤完一（むとう・かんいち）1892～1982

1892（明治 25）年 11 月 9 日岐阜県本巣郡に生まれる。図画教員の傍ら 1912 年「岐阜洋画研究会」を県内同人で立ち上げ（『みづゑ』96）、1924 年まで岐阜の洋画普及に尽力した。少年期より『ヒュウザン』や『現代の洋画』等に触れ、洋画への思いを募らせていたようである。1914 年上京（1915 年末帰郷）、同郷の長原孝太郎の紹介で藤島武二の川端絵画研究所に入学する。同年第 3 回光風会展に水彩画《長良川》が入選。すでに東京時代には木版で自画像を試みたり、研究所の同級生らと木版賀状のやり取りを確認できる。1921 年にはエッチングも試作し、上山二郎から教えを受けた（『エッチング』4）。山本鼎の自由画教育にも感銘を受け、図画教育の道を志す決意をする。1922 年岐阜県本巣中学校勤務、1923 年文部省中等教員検定試験に合格し、1925 年より大分県師範学校へ転任した。大分時代の武藤については、大分を中心とした九州地方における版画教育・普及、また版画を通して結んだ九州と日本全国のネットワークが特筆される。1928 年の版画誌『木版』（1～4）に始まり、平塚運一との講習会から生まれた 1931 年『彫りと摺り』（1～8）、1933 年『九州版画』（1～24）といった版画誌には東京・愛媛・静岡・青森など日本各地からも作品が寄せられ（大分では宇治山哲平も木版を出品）、戦時中であって息の長い 1941 年まで刊行した。『九州版画』は版画誌としては珍しく、今純三・高羽敏・田中進といったエッチャーた

ちが作品を多く寄せている。武藤自身も『白と黒』『新版画』『ゆうかり』『櫟』『陸奥駒』『朱美之集』など数多くの版画誌に自作を出品した（1935 年より武井武雄の賀状交換会『櫟の会』にも参加）。1929 年より中島重太郎と交流を持ち、翌年『版画 CLUB』第 2 年第 2 号（創作版画倶楽部 1930.2）に木版画《山の温泉》の図版が掲載、1931 年 8 月には中島・平塚運一を迎え「創作版画講習会」を大分師範で実施した（1933・1935 年にも実施）。本講習会で武藤は平塚から木口木版についても教授され、その後小品を生み出している。講習会中、新興版画会展（6 月 東京）の大分出展も開催され、山本鼎・石井鶴三・恩地孝四郎・前川千帆などの版画が特別展示された。同年木版画集『大分風景版画集』を出版。また、第 1 回日本版画協会展に《三潭印月》《銭塘六和塔》《阿蘇噴煙》、1932 年の第 7 回国画会展に《城》が入選するなど、1930 年頃より精力的に木版画を制作している（日本版画協会展には 1954 年まで継続出品）。一方、1932 年より日本エッチング研究所の西田武雄と親交を深め、小型プレスを購入してエッチングを本格的に研究。以降『エッチング』にも作品や文章を多く寄稿する。1934 年 8 月西田と「エッチング講習会」を大分師範で開催、県内の図画教員や師範生徒はもとより宮崎・福岡・山口・高知県などからも参加があった。1936 年 2 月武藤完一氏洋画個展を大分市で開催、6 日間で入場者は 1 万人を超えたと言う。1937 年 8 月に西田武雄と広島第一高等学校でエッチング講習、1938 年 7～8 月には西田・小野忠重・林紀一郎らと共に「版画講習会行脚」と称し北海道・青森・秋田・新潟・富山・石川・岐阜県を回った（武藤は青森に残って今純三から印刷術を学び、岐阜で合流）。1939 年には有田四郎の宮崎師範でエッチング講師を務める。この間、1934 年『創作版画集』（藤牧義夫の帝展入選作《給油所》が原色版で掲載）、1935 年『誰にも出来る版の作り方』『版画手本』、1938 年『エッチング技法』などを出版し、同年日本版画協会会員に推挙された。1940 年 10 月文部省主催二千六百年奉祝美術展に《蘇州風景》が入選、12 月には会長を田辺至に西田武雄らと「日本エッチング作家協会」設立。評議員として 1942 年まで同協会の第 1～3 回展にエッチングを出品した。また、1941 年の第 4 回新文展に《苦力の家（大連）》、1943 年の第 18 回国画会展に《支那風景》、第 6 回新文展に《江南風景》が入選し、1944 年の《支那のぞき》も合わせ中国風景に取材したエッチング群が武藤の銅版画家としてのイメージを方向付けたと言えよう。終戦後は、日展・日本版画協会展・光風会展を主軸に銅版画を発表し、《魚住滝》《裏通り》《造船所》などの代表作を残している。1957 年武藤完一銅版画展を大分市トキハで開催。また、1960 年棟方志功・永瀬義郎・武田由平らと「日版会」を設立し、翌年には武田と「大分県版画協会」を立ち上げた。1946 年大分県美術協会洋画部長、1950 年より大分大学教授、1955 年大分県美術協会委員長、1961 年大分県立芸術短期大学教授などを歴任。長年に渡って大分の図画教育・美術教育に貢献し、明快素朴で穏やかな画風を貫き多くの教え子を育て上げた。1982（昭和 57）年 9 月 28 日大分市で逝去。勲三等瑞宝章受与。【文献】「自己を語る」『エッチング』38／『武藤完一遺作特別展』図録（大分県立芸術会館 1983）／武藤準人『版画家・武藤完一資料集（戦前篇Ⅰ）－作家年譜を中心として－』（東京学芸大学大学院教育学研究科 2010）／『創作版画誌の系譜』（武藤）

武藤萬里子（むとう・まりこ）1918～2015

1918（大正7）年12月、武藤完一の長女として岐阜県に生まれる。戦前、器用な性格を活かし、完一のもとで《[花]》などのエッチング作品を何点か制作した。戦後は結婚を機に宮崎へ移り住む。2015（平成27）年12月宮崎で逝去。【文献】「武藤完一蔵 エッチング小品集」（武藤

武藤六郎（むとう・ろくろう）1907～1995

1907（明治40）年岐阜県山県郡高富町に生まれる。1928年東京美術学校日本画科に入学。日本画を学ぶ傍ら、校友会活動として木版画を始め、1930年の版画部展（11.28～29 講堂前廊下）に《東京駅》《宮城にて》を発表。公募展へは、1931年の第1回新興版画会展（6.21～25 新宿・三越、大分出張展：8.5～6 大分・丸吉呉服店）に《大空へ》《東京駅》《ガス工場》を出品し、受賞。「きつつき」同人に推挙されるも辞退。同年の第1回日本版画協会展にも《夜の日本橋》が入選した。翌1932年も第9回白日会展に《帝大構内》、第2回日本版画協会展に《日暮里遠望》が入選したが、自らも小野忠重らと「新版画集団」（1932.4）を結成。機関誌『新版画』の第1号（1932.6）に木版の表紙絵と《町の屋根》を発表。以後、第3～6・8・9・11・12・15・16・18号（1932.8～1935.12）に作品を発表。また、新版画集団展の第1回展（1932.10.15～20 銀座・川島商店）に《夜の日本橋》《東京駅》など7点を出品し、以後、第6回展（1936.10）まで毎回出品。第5回展（1935.12）では武藤の「小笠原滞島作品」が特集展示された。また、集団が主催した小品展（1934.4）、第1回アンデパンダン展（1934.6）、江戸東京風景版画展（1934.7）、小品展（1935.5）、現代版画展（1935.9）などにも積極的に出品した。その間、1933年には『武藤六郎版画集（第1輯）』を刊行し、《新橋演舞場》《清洲橋》《夜の日本橋》《東京駅》《長良橋》を収めた。1934年東京美術学校を卒業。翌1935年には「武藤六郎小笠原風景版画展」（6.19～21 神田・東京堂画廊）を開催し、第4回日本版画協会展に《鳥の見えたる段島（小笠原島）》《タコの木の下に在る泉（小笠原島）》《無人島と赤きカノ[ヌ]ー（小笠原島）》《岩蔭に実るパ、イヤ（小笠原島）》《父島の町（小笠原島）》を出品。翌年の第5回展（1936）にも《森蔭の女》を出品した。1936年12月に「新版画集団」を解散。翌年3月には「造型版画協会」が結成されたが、不参加。その後、1939年の第26回再興日本美術院展に日本画《残雪》を出品した。1944年頃は牛込区早稲田南町に住むも、その後帰郷し、戦後は岐阜市松山町夕陽丘に住む。展覧会は、1949年の第34回再興日本美術院展に再び出品。また、同年に再開した小野らの「造型版画展」に誘われ、同年の第8回展に《長良川》《ひまわり》《風景》、第9回展（1950）に《家》3点、第10回展（1951）に《奈良の街》など7点、第11回展（1953）は不明だが、第12回展（1954）に《山》など10点を出品。1955年の小品展にも出品したと思われる。その間、1952年に版画集『偶像』（未見）を刊行。1961年には日本版画院の会員となり、以後出品。一方で、1953年頃から「折染」を研究し、1964年の第11回日本伝統工芸展などにも出品した。1972年頃までに中部女子短期大学に勤務。1978年に『版画と折染』（思文閣出版 木版画・折染入り 限定280）、1991年に『武藤六郎 版画集』（私家版）を刊行した。1995（平成7）年9月28日岐阜市で逝去。【文献】『第一回新興版画会出品目録』（1931）／伊藤伸子「東京美術学校校友会版画部 1928-1933」『日本近代の青春 創作版画の名品』展図録（和歌山県立近代美術館・宇都宮美術

館 2010）／『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻』（ぎょうせい 1997）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／『同窓生名簿 東京美術学校 東京芸術大学美術学部 東京芸術大学大学院美術研究科 昭和47年版』（1972.12）／『創作版画誌の系譜』（三木）

棟方志功（むなかた・しこう）1903～1975

1903（明治36）年9月5日青森市大字大町一番地に生まれる。1916年市立長嶋尋常小学校を卒業、1920年まで家業の鍛冶屋を手伝う。1921年市立青森中学校の図画教師で画家の小野忠明に感化されてゴッホに夢中になり、油絵の手ほどきを受ける。また松木満史・鷹山宇一らと洋画グループ「青光社」を結成し、展覧会を開催した。1924年上京、帝展などへの出品を始めるが落選が続く。1926年第5回国画創作協会展出品の川上澄生による木版画《初夏の風》に感銘し版画への興味を高める。一方、第3回白日会展に油彩画が入選、公募展初入選となった。1927年第7回日本創作版画協会展出品の古川龍生の木版画に感動し、まもなく版画制作を手がける。1928年第8回日本創作版画協会展、第6回春陽会展に版画が初入選。またこの年平塚運一の指導を受け、それをきっかけに版画誌『版』の同人となり、国画会展に出品することとなる。第9回帝展に油彩画が初入選。1930年第7回白日会展に版画と油彩画が入選し白日会賞を受賞、第5回国画会展に版画など4点が入選する。1931年最初の版画集『星座の花嫁』（創作版画倶楽部刊）を刊行。また国画会展やこの年創設の日本版画協会の展覧会に版画を出品。初めての個展を神田の文房堂で開催する。1932年日本版画協会会員に推挙されたほか、第7回国画会展に出品して国画奨学賞を受賞。1933年料理熊太主宰・発行の版画誌『版藝術』で「棟方志功特集」が組まれる。1934年同郷の先輩で詩人の福士幸次郎から詩誌『新詩論』を贈られ、同誌掲載の佐藤一英による「大和しめわし」に感動、版画化の準備を進める。また蔵原伸二郎と親交が始まり、さらに日本浪漫派の新進評論家の保田与重郎を知り、文学者との交流が広がる。1935年第10回国画会展に独自の「布置法」で制作した《万葉譜・矢車花》を出品し、会友に推挙される。1936年第11回国画会展に《環珞譜・大和しめし版画巻》を出品。国画会工芸部会員の濱田庄司と民藝運動創設者の柳宗悦の注目する所となり、京都から河井寛次郎も呼び出されて絶賛された。この出会いを一大転機として、民藝運動の指導者の教えのもと、仏典や日本神話、古典文学などに取材した木版画制作を推し進める。やがて大原孫三郎らの支援を受けるようになり、大作の制作などもできるようになって安定した創作活動が可能となる。一方、この年保田の第一評論集『日本の橋』を装丁、以後多くの文学者の装丁・挿絵を手がけるようになる。1938年第2回新文展に版画《勝鬘譜善知鳥版画曼荼羅》が入選、版画ではじめて特選を受賞する。この年、日本民芸館第12回特別展観に最初の本格的な裏彩色作品《観音経版画巻》を出品。日本版画協会を退会。1939年日本民芸館で棟方志功展が開催され、『工藝』第101号が棟方を特集する。1940年柳・保田・濱田に同行して沖縄を旅行。第15回国画会展に《阿吽譜・二菩薩釈迦十大弟子版画屏風》を出品、棟方の代表作となる。また日本橋・高島屋で棟方志功新作日本画展を開催、以後1942年まで開催。1941年第5回佐分賞を受賞。1942年、この年から版画を「板画」と称するようになる。1943年

国画会会員。1945年4月富山県福光町に疎開する。その後東京の自宅が大空襲で焼け、これまでの版木を失う。1946年疎開先の福光町に土地を借り、住居「愛染苑」を新築して住む。1948年国画会工芸部会員に推挙される。1951年疎開先の福光町から東京に戻る。1952年渋谷・東横百貨店で倭絵（日本画）と板画の展覧会を開催、以後1974年まで毎年開催（途中1964年からは日本橋・東急百貨店で開催）。この年「日本板画院」を創立する。1953年国画会を退会。1955年第3回サンパウロ・ビエンナーレに出品し、版画部門でメタルルジカ・マタラッツォ賞（最優秀賞）を受賞。1956年第28回ヴェネツィア・ビエンナーレに出品し、版画部門で国際大賞を受賞。この年鎌倉市にアトリエを設けた。1958年日展会員。1959年ロックフェラー財団とジャパン・ソサエティの招きで渡米し、大学での講義・講演・実演・個展開催などを行う。1960年日展評議員。またこの年「日版会」を創立する（1961年退会）。1963年藍綬褒章を受章。1965年朝日賞文化賞を受賞。またこの年ジョージ・ワシントン大学の招きで二度目の渡米。1967年三度目の渡米。1969年青森市名誉市民に選ばれる。1970年毎日芸術大賞を受賞。また、文化勲章を受章、あわせて文化功労者となる。1972年草野心平らとインドを旅行。1974年第25回放送文化賞を受賞。この年四度目の渡米。1975（昭和50）年9月13日東京都杉並区の自宅で逝去。【文献】棟方志功『わだばゴッホになる』（日本経済新聞社 1975）／『棟方志功全集』全12巻（講談社 1978～1979）／宇賀田達雄『折りの人 棟方志功』（筑摩書房 2001）（滝沢）

棟方末華（むなかた・まっか）1913～1985

1913（大正2）年4月14日青森県青森市に生まれる。本名は末吉。1931年青森市夜間中学校を卒業。同年発足した第1回東奥美術展に油彩画《静物》《たわむれ裸女》が入選。その後上京したが、第4回展（1934）にも「末華」名で油彩画《荒川の秋》を出品した。1939年に府中刑務所の事務官となり、1974年まで勤務。木版画を始めた時期は不明であるが、1940年の第9回日本版画協会展に《社と奥殿》《十和田湖初冬》《社頭風景》が初入選。翌1941年には第18回白昼会展に《夏の漁師》《蓮池と社祠》、第16回国画会展に《松椿・井戸のある家屋》、第5回造型美術展に《木立と神殿》《春猫》《十和田・紫明溪》《樹立と鐘楼》《木の間にゆる見ゆる四重塔》、第4回新文展に《秋深き山門と石像》、第10回日本版画協会展に《和かなる春の日》が入選した。その後、日本版画協会展は第11回展（1942）に《海の見える風景》《夏の海辺》《山縫ひの村》、第12回展（1943）に《馬場門櫓並木》《古戦場よりの富士》が入選。1944年には会友となり、同年の第13回展に《聖蹟桜ヶ丘》を出品した。また、国画会展は第17回展（1942）に《十和田牛のある奥入瀬》《寺院に至る道》、第18回展（1943）に《神苑の朝》、第19回展（1944）に《医王山最勝院七重塔》が入選した。その間、東奥美術展の依頼作家として第11回（1941）に《薰秋》、第13回展（1943）に《神苑の雪》を出品したほか、平塚運一門による『きつつき版画集』（きつつき会）の昭和17年版（1942.8）に《隧洞よりの海辺》、昭和18年版（1943）に《馬場大門櫓並木》を発表している。戦後は、1946年に日本画協会会員、翌1947年には国画会版画部会友となり、両展へ出品を続ける一方、1952年には「日本板画院」の創立に参加。1960年には「日版会」の会員となり、日本版画協会・国画会を退会するも、翌年には「日版会」も退会した。1965年

より日本浮世絵協会理事を務め、1974年日本板画院会長。1976年に青森県褒賞を受賞。また、1986年には東京都美術文化功労者として表彰された。1995（平成7）年5月12日東京都府中市で逝去。【文献】『東奥美術展の画家たち—青森県昭和前期の美術—』展図録（青森県立郷土館・東奥日報社 2005）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／『日本美術年鑑』平成8年版（東京国立文化財研究所 1997）／『創作版画誌の系譜』（三木）

村井辰夫（むらい・たつお）1904～1998

1904（明治37）年10月9日富山県東礪波郡城端町（現・南砺市）に生まれる。号は「辰」「立」「立魚」を使用。1923年富山県立工芸学校木工科を卒業。東京美術学校彫刻科木彫部に入学し、高村光雲・関野聖雲に師事する。在学中、太田重範・紺谷英儀・田近政二・辻堂善次郎ら版画に興味をもつ仲間と版画同人誌『樵の樹（仮称）』を刊行する。詳細は不明なものの第8号「風」（1926年11月）には「辰」の名で単色の木版画《老樹》《晩秋》を発表。その後、彫刻科木彫部の森大造や太田重範らと「樵の樹の会」（樵の樹版画部とも表示あり）を立ち上げ、1928年2月に「樵ノ樹第1回創作版画展覧会」（日本校講堂入口廊下 2.17～18）を開催。木版画《雪景一》《雪景二》《自画像》《静物》の4点を出品。第2回展は不明であるが、同年6月の「第3回樵の樹版画展覧会」（6.15～16 大講堂廊下）に木版画《友人の像》《猫》《畑》の3点を出品する。美校を1928年3月に卒業。1930年11月に開催された版画展覧会（11.28～29 大講堂廊下）にも木版画《待合室》を出品する。在学中から鶴田吾郎・石井鶴三に師事し、卒業後も指導を受ける。1928年第6回春陽会展に油彩画《鯛の燻製》が入選するが、1931年の第12回帝展に塑造《童心賛美》が初入選した後は、文展・日展などに木彫作品を中心に出品する。1933年には森大造らと「九元会」（創立会員8名）を結成し、第10回展（1944）まで続ける。1945年、郷里の城端に疎開するが、この年の前後には富山県に多くの画家が疎開してきている。中でも織田一磨・棟方志功は地元郷土画家に多くの影響を与えた。戦後1946年から開催された「富山県総合美術展」には、村井も参画し、審査員を務めた。版画では織田・棟方に村井からも参加して、地元版画家東一雄らとて「北陸大衆版画協会」を設立し、1948年富山大和にて「北陸版画協会展」（1回展のみ）を開催した。1951年4月、旧居東京都豊島区要町に戻る。1952年の第1回彫刻創型会（日本橋・三越本店）に出品し、以後も発表を続け、第30回記念創型展（1981）では「特選喜寿コーナー」が設けられ木彫・石彫など9点を出品する。1994年1月に東京都世田谷区民ギャラリー「Spaces」において、4月には郷里富山県礪波郡城端町史館蔵回廊において、彫刻作品による「村井辰夫展」が開催された。戦前戦後を通じて版画制作は続けられ、『村井辰夫作品集』（形文社 1995）には木版画《星座と鳥人》が付された限定版も発行されている。1998（平成10）年7月5日東京にて逝去。2009年郷里城端町にて「村井辰夫木版画展」（10.20～11.29 ギャラリー蔵布都藍）が開催され、《星座と鳥人》など木版画30点が展示された。【文献】『〔東京美術学校〕校友会月報』26～8.27～3.29～7／「村井辰夫年譜」『村井辰夫作品集』（形文社 1995）／『きよべかわらばん』（きよべ呉服店 2009.10）／伊藤伸子「東京美術学校校友会版画部 1928-1933」『日本近代の青春 創作版画の名品』展図録（和歌山県立近

代美術館・宇都宮美術館 2010) / 麻生恵子「版画にみる富山の美術」(ネット検索 2019) (加治)

村井正誠 (むらい・まさなり) 1905 ~ 1999

1905 (明治 38) 年に岐阜県大垣市に生まれる。小学生の頃から和歌山県南部の街、新宮で育つ。戦前からの抽象画家として高く評価されているが、版画の制作も多い。村井の版画には、木版・銅版・石版・孔版という、手がけた版種の多様性、そして大正の薫り高い「自画自刻自摺」の創作版画から、現代の製版・印刷を手がける工房との共同制作へ、という日本の近代版画史そのもののような制作歴にも注目すべき側面がある。村井がはじめて版画を手がけたのは、1925 年に文化学院大学部美術科で同人誌『CHER PEINTRE』を創刊し、表紙や挿絵を木版で制作した時である。文化学院では創作版画運動の原点とされる『方寸』を創刊した石井柏亭、水彩画家であり、版画家であった赤城泰舒、美しい版画口絵で知られる『明星』を発行した与謝野寛・晶子夫妻が教えており、自然に版画に親しめる環境だった。文化学院卒業後にパリへ渡り、1932 年に帰国した村井は、1934 年に銀座・紀伊國屋ギャラリーで初めての個展を開き、続いて美術団体から離れて友人の山口薫・矢橋六郎・長谷川三郎らと「新時代洋画展」を創立した。新時代洋画展は、ほぼ毎月、銀座の紀伊國屋ギャラリーで展覧会を開いて人々の生活圏に近い場所で作品発表をすることで、生活のレベルで絵画と人との密接な関係を結ぼうとした。その試みの一つが油彩画ばかりでなく紙支持体の作品の展示も行うことであった。この試みは「良心的な作品を示して一般に鑑賞して貰ふといふ目的から、一步を進めて、自分達の作品を最も安価に大衆の中に」もたらす、「最も時代に即した展覧の形式」と美術雑誌の展覧評でも注目されている。このころ、村井は版画の制作に力を入れており、木版画だけでなく銅版画や石版の作例も残されている。この新時代洋画展の頃に、村井の版画は完成していった。この頃すでに油彩画家であるだけでなく版画家として認められていたことは、戦時中に「版画奉公会」の会員であったことでも推察できる。戦後、数々の国際版画展への出品をはじめ、第 3 回東京版画ビエンナーレ展では文部大臣賞を受賞した。また、日本ではもっとも早い時期からシルクスクリーンの制作をはじめており、1956 年ニューヨークで開かれた第 17 回ナショナル・セリグラフ協会にも出品している。また、1971 年に村井の石版画を製版・印刷していた女屋勘左衛門の東京版画研究所創立時には、北川民次・岡鹿之助らとともに賛助した。晩年には、版画による個展を毎年のように開催している。1999 (平成 11) 年 2 月 5 日東京都世田谷区で逝去。【文献】尾川多計「新時代洋画展」『アトリエ』11-9 (1934.9) / 『村井正誠展 色と形と心』図録 (東京新聞 1995) / 『知られざる刷り師 女屋勘左衛門と日本のパントゥル・グラヴール』展図録 (目黒区美術館 1998) / 『生誕 110 年村井正誠展 ひとの居る場所』図録 (和歌山県立近代美術館 2015) (植野)

邨井正行 (むらい・まさゆき)

1940 (昭和 15) 年北海道名寄中学 3 年生に在学中、西田武雄主宰の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第 91 号 (1940.6) に友人を描いたセルロイド版作品が掲載されている。当時、名寄中学校には版画教育に熱心な教師松田操がおり、松田は版画制作を行っている一方で、

図画教育の一環として生徒に銅版画技法の指導を行っていて、『エッチング』誌には講習会の受講記や随筆などを投稿している。邨井も松田の教えを受け作品を制作したものであり、邨井以外にも名寄中学校生徒の作品 4 点が掲載されている。「研究所通信」には松田が生徒の作品をエッチング研究所の西田に送ったことが記されている。【文献】松田操「名寄講習日記」『エッチング』70 (1938.8) / 『エッチング』91 (加治)

村岡應東 (むらおか・おうとう) 1873 ~ 1946

1873 (明治 6) 年 2 月 21 日東京に生まれる。本名宜雄。初号は桜塘、他に緑巽舎、自適と号した。1880 年に松本楓湖に師事し、門下。1899 年「巽画会」発足に参加。1903 年には「烏合会」に参加。1910 年第 4 回文展に《渡船 (六曲半双)》が初入選し、褒状。以後、文展・帝展・新文展に出品した。1920 年『義士大観』に《美人と烈士》の木版 1 図がある。1946 (昭和 21) 年 5 月 16 日愛知県寺津の疎開先で逝去。【文献】『20 世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社 1998) (岩切)

村垣正澄 (むらがき・まさずみ)

1939 (昭和 14) 年の第 3 回造型版画展に木版画《公園一隅》を出品。出品時は横浜に住む。【文献】『造型版画協会第三回展目録』(1939) (三木)

村上綾子 (むらかみ・あやこ)

1931 (昭和 6) 年 8 月、武藤完一の尽力により大分市で開かれた創作版画講習会 (3 ~ 7 大分県師範学校 講師: 平塚運一) に参加。木版画を学び、この講習会を記念して武藤により創刊された版画誌『彫りと摺り』(大分県師範学校内「版画研究会」) の第 1 号 (1931.9) に《睡蓮》、第 2 号 (1931.11) に《柘榴》、第 4 号 (1932.6) に《蛇母》、第 5 号 (1932) に《静物》、第 6 号 (1932.12) に《柚子二つ》、第 8 号 (1933.6) に《白い花》を発表。また、『郷土図画』第 1 巻第 5 号 (版画特集号 1931.10 大分県美育研究会) にも講習会で制作したと思われる《睡蓮》《つゆ草》が掲載された。その後、1933 年に第 2 回目の創作版画講習会 (8.1 ~ 5 大分県師範学校 講師: 平塚運一) が開催されたが、これにも参加か。また、この講習会を機会に『彫りと摺り』は「九州版画」(大分県師範学校内「九州版画協会」) に刷新・改題されたが、その第 1 号 (1933.9) に《魚》、第 7 号 (1935.4) に《さくら草》を発表。この他、静岡の創作版画誌への参加もあり、『ゆうかり』(童土社) の第 11 号 (1932.10) に《くつわむし》、第 15・16 号 (1933.7) に《野苺》、第 17 号 (1933.10) に《向日葵》、第 24 号 (1934.12) に《賀状》、『かけた壺』(中川雄太郎) の第 17 号 (1933.12) に《山梔》、第 19 号 (1934) に《クチナシ》、第 22 号 (1934.6) に《草》を発表した。なお、作品発表には「綾子」の他、「綾」の名前も使う。発表時は大分県北海部郡臼杵町海添に住むが、同地の小学校教員か。【文献】『郷土図画』1-5 (1931.10) / 池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1 (2002.9) / 『創作版画誌の系譜』(三木)

村上鑄三郎 (むらかみ・いさぶろう)

1929 (昭和 4) 年の童土社同人第 1 回創作版画展 (10.5 ~ 7 静岡・田中屋襦衣店) に木版画《月夜》を出品。【文献】『童土社同人第一回創作版画展覧会出品目録』(1929) (三木)

村上華岳（むらかみ・かがく）1888～1939

1888（明治21）年7月3日大阪天満松ヶ枝町（現・北区松ヶ枝町）に生まれる。本名は武田震一。家庭の事情で神戸の叔母の嫁ぎ先の村上家に預けられ、その後養父母の姓である村上を名乗る。1903年京都市立美術工芸学校に入学。卒業後、1909年京都市立絵画専門学校に学び、1911年卒業。同期生には入江波光・榊原紫峰・土田麦僊・小野竹喬等がいた。在学中の1908年第2回文展に《驢馬に夏草》を出品し、三等入選。1916年第10回文展で《阿弥陀》が特選となる。翌年の文展で選外となり、1918年入江・土田・榊原・小野・野長瀬晩花らと「国画創作協会」を設立、翌年の第2回展に《日高川》、第3回展に《裸婦》を出品。国画創作協会展に出品するが、後半生は喘息のため、闘病生活を強いられ、1926年全ての美術団体を離れ、白描仏画や六甲風景、牡丹などの小品を描く。版画においては、既に絵画専門学校時代に教授中井宗太郎の影響を受け、華岳は《夜桜》を、波光は《芝居居》の多色木版を制作している。「これらは創作版画の影響というより、日本の伝統的な美術への関心から起きたものであろう」（岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府立総合資料館 資料館紀要』12（1984））といわれる。1913年には、河合卯之助・内藤琪土（房次郎）・松宮實（芳年）・森谷梢月（南人子）と開催した試作展（11.3～5 京都・三條青年会館）に絵画《灯》《夕》と共に作品名を欠くが木版画4点を出品。また戦前に加藤版画研究所から原画をもとにした多色木版《聖観音》が制作されている。1939（昭和14）年11月11日神戸市で逝去。【文献】「物故作家及美術関係者 村上華岳」『日本美術年鑑』昭和15年版（美術研究所 1941）／原田敦子編「河合卯之助 展覧会・頒布会資料集」『宮城県美術館研究紀要』9（1997）（森）

村上貞雄（むらかみ・さだお）1901？～没年不詳

1901（明治34）年生まれか。師の名前などは不明であるが、早くから画塾で日本画を学んでいたと思われ、1923年の第9回大阪美術展に《とんど》が初入選。続く第10回展（1924）と第11回展（1925）にも連続して入選している。1927年か、京都市立絵画専門学校選科に入学。石崎光瑠に学び、在学中の1928年、第9回中央美術展に《人形》、第9回帝展に《くさむら》が初入選。翌1929年の第10回帝展にも《罌粟》が入選した。1930年同校を卒業。研究科に進み、1934年の大正記念京都美術館美術展に日本画《野趣》を出品した。版画は、徳力富吉郎の手ほどきを受けたというのが詳細は不明。1932年の第1回関西創作版画展（11.3～6 京都府植物園・大正記念館）に木版画《静物》、翌1933年の第3回京都創作版画会展（1.10～11 京都・大丸）に木版画《静物》《むぎわら細工（万華鏡ノ内）》《サイドカーと電車（万華鏡ノ内）》《静物（万華鏡ノ内）》《果実》《ブドウ（万華鏡ノ内）》《パイナップ（万華鏡ノ内）》を出品した。1944年頃は大阪市西成区玉出町新町通に住む。また、時期は不明であるが、高島屋美術部に勤務したという。著書に伝統木版による『百花図譜』（芸艸堂 1932 未見）がある。【文献】岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府立総合資料館紀要』12（1984.3）／『版画家名覧』（山田書店版画部 1984）／『現代美術家総覧』（美術年鑑社 1944）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）（三木）

村上恒雄（むらかみ・つねお）

版画同人誌『彫りと摺り』（1931～1933 全8冊）の主宰者武藤完一は1933年8月に版画講習会（講師：平塚運一 大分県師範学校）を開催し、これを機に創作版画を九州全土に広める意図で『彫りと摺り』を『九州版画』（1933～1941 全24冊）と改題する。その第5号（1934.10）に《風景》、第6号（1935.1）賀状特集に《猪突》を発表。当時、村上は大分県大野郡牧口小学校の教員として勤務していた。その大野郡では教員の生野正義が教員仲間を集めて「大野版画協会」を立ち上げ、版画同人誌『大野版画』（1933～1934 全4冊）を創刊。その第3号（1934.5）に《桐の花》、第4号（1934.7）に《風景》と表紙絵の《トマト》を発表する。武藤完一は《桐の花》について「構図と表現の仕方はうまい。紫の花にねづみでもかけたら一層ひきたったと思ふ」（第4号「第3号評」）と評している。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

村上 仁（むらかみ・ひとし）

1937（昭和12）年の『エッチング』62号（1937.12）に、溪流に架かる橋と付近の温泉宿と思われる風景を描いたエッチング作品が掲載されている。当時、大分県師範学校専攻科に在学中。【文献】『エッチング』62（樋口）

村上 力（むらかみ・りき）

1928（昭和3）年4月発行の版画誌『ネヴェロン NEVERON』1号と同年8月発行の同誌2号の編集を担当。住所は東京都市外世田谷町代田。また、『マヴォ』掲載のリノカットに共鳴するキュビズム的造形の木版多色摺を制作して同誌1号・2号の表紙を飾ったほか、1号に《ロシア風風景》や静物をモチーフとする《コンポジション》と題する、マヴォのリノカットさながらの白と黒によるキュビズムの木版画を4点、2号に《COMPOSITION》と題する同様の木版画を2点掲載した。1920年代の新興美術の動向に最も感化されて制作した版画家のひとりであったが、『ネヴェロン』以外での活動は不詳。【文献】『創作版画誌の系譜』（滝沢）

村崎啓次郎（むらさき・けいじろう）

1938（昭和13）年7月30・31日両日、北海道空知郡岩見澤中央小学校で開催の西田武雄を講師に招いたエッチング講習会に参加。その時に制作したと思われる人形や玩具を描いたエッチング《[静物]》（「村崎啓次郎」名）が『エッチング』70号（1938.8）に掲載され、71号（1938.9）には「受講感想」（「村崎啓次郎」名）を寄稿。当時、北海道岩見澤に在住。【文献】『エッチング』70・71（樋口）

村瀬義徳（むらせ・よしのり）1877～1938

1877（明治10）年3月愛知県丹羽郡布袋町（現・江南市）に生まれる。「宣得」とも称す。幼少より絵を得意とし、東京美術学校西洋画科に入学、黒田清輝に師事するが、1898年に退学し、日本画に転じ寺崎広業に師事する。第10回文展（1917）に日本画《緑陰》、第11回文展（1918）に《供養》を出品。1918年に画集『宣得近作』を個人出版する。山水画・人物画・花鳥画を得意とし、注文絵を描きながら全国を旅する。アイヌ絵の描き手として、大正時代に『アイヌ熊祭屏風』なども制作している。1929年毛利正直の原文を校訂・注釈、挿絵を加えた『薩摩奇書 大石兵六夢物語』（巧芸社）を出版。1938（昭和13）年8月15日東京で逝去。加賀変哲『闇光』上下（誠進堂

1911) に木版口絵の下絵を描く。【文献】山田奈々子『木版口絵総覧』(文生書院 2005) / ウィキペディア「村瀬義徳」(2019.5) (樋口)

村田 勇 (むらた・いさむ)

1933 (昭和 8) 年 8 月、日本エッチング研究所主催の第 1 回エッチング講習会 (西田武雄講師、1 ~ 3) が開催され、参加者 13 名の一人として村田も参加する。その時に制作した作品《[風景]》が『エッチング』10 号 (1933.8) に「村田氏の風景は講習会での佳作。針の使い方がなかなかいい、」の作品評とともに図版掲載されている。当時、東京淀橋第三小学校訓導。【文献】『エッチング』10 (樋口)

村田信八 (むらた・しんぱち)

1938 (昭和 13) 年 8 月 9 日、西田武雄・林紀一郎を石川県七尾市に迎え、エッチングの指導を受ける (受講者は村田と七尾高女教員瀬尾永敏の 2 名)。その時に制作したと思われるスコップを持って栈橋を渡る男の作品が『エッチング』70 号 (1938.8) に掲載され、また同号に「エッチング試作偶感」を寄せる。当時、七尾中学校教員。【文献】『エッチング』70 (樋口)

邨田丹陵 (むらた・たんりょう) 1872 ~ 1940

1872 (明治 5) 年 7 月 20 日東京に生まれる。父は旧田安藩士で故実家村田直景。本名は靖 (ただし)。1880 年母の実家村田氏を継ぐ。同年吉澤素山に学び、1883 年川辺御楯に入門し、丹陵を名乗る。1884 年第 2 回内国絵画共進会に出品。1890 年第 3 回内国勧業博覧会に《石橋山合戦図》を出品。翌年日本青年絵画協会の創立に参加し、以後同会のために尽力。1888 年日本美術院の創立に際して特別賛助会員となる。1907 年第 1 回文展に《大宮人図》を出品し、三等賞を受賞するが、以後、展覧会出品を断つ。1935 年の明治神宮聖徳記念絵画館の壁画《大政奉還図》を制作している。『義士大観』(義士会出版部、1920・21) に《不破数右衛門の悪戦》(多色木版) の原画を描く。1940 (昭和 15) 年 1 月 27 日東京府下北多摩郡砂川村で逝去。【文献】「物語作家及美術関係者 邨田丹陵」『日本美術年鑑』昭和 16 年版 (美術研究所 1942) (森)

村田露地 (むらた・ろじ)

小野忠重『近代日本の版画』(三彩社 1971) の「資料篇」によれば、1915 (大正 4) 年 3 月に創刊された自画木版画誌『樹海』(樹海社 横浜) に永尾鈍虻・鎌田緑峰らとともに木版画を発表。作品は未見。【文献】小野忠重「版画誌・連刊版画集一覧」『近代日本の版画』(三彩社 1971) / 河北倫明「第十四章 挿絵と版画」『近代日本絵画史』(中央公論社 1978) (樋口)

村松延夫 (むらまつ・のぶお)

1928 (昭和 3) 年 8 月に東京で刊行された版画誌『NEVELON』第 2 号 (ネヴェロン社) に木版画《滝》を発表。翌 1929 年の第 9 回日本創作版画協会展に木版画《山茶花》、1931 年の第 1 回新興版画会展 (6.21 ~ 25 新宿・三越) にも木版画《静物》が入選。この《静物》については、「村松延夫氏 静物、幾分復 [複] 製的の感なきに非ずだが、摺方を充分研究した人は自然に此位の刷りは出来るかと思はれる」(きつつき会一会員「新興版画第一回展覧会批評」『版画 CLUB』3 - 1) との評がある。【文献】『第一回新興版画会出品目録』(1931) / 『版画 CLUB』3

- 1 (1931.8) / 『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) / 『創作版画誌の系譜』(三木)

村松ふさ (むらまつ・ふさ) 生年不詳 ~ 1932

愛知県岡崎町大字竜田町 (現・岡崎市) に生まれる。幼少時に父を亡くし、兄の隆次や妹と共に素封家の祖父母に育てられる。兄隆次は 1925 年に友人の小野英一と版画同人誌『版画』(1925 全 2 冊) を創刊。ふさは兄について洋画の勉強しており、兄の勧めで版画も制作し、第 1 号 (1925.3) に木版画《T 様の像》《窓》を発表。「まだ版画と云ふものによく理解をもたぬ次第ですけれども私は桃色に塗られた多くの誌画 (マ) より版画の美しさが好きです」とのコメントを残しているが、その後の発表はない。1932 (昭和 7) 年に逝去。【文献】『近藤孝太郎とその周囲』展図録 (岡崎市美術館 1983) / 桃山将「『試作』のことども 版画雑誌の誕生」『古本屋の蕋蓄 店主たちの書物談義』(燃焼社 1997) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

村松隆次 (むらまつ・りゅうじ) 1908 ~ 1928

1908 (明治 41) 年 11 月 21 日愛知県岡崎町大字竜田町 (現・岡崎市) に生まれる。6 歳の時に父を亡くし、母親は実家に戻り再婚したため、二人の妹と共に素封家の祖父母に育てられる。地元の愛知県第二師範学校附属小学校尋常科を卒業し、岡崎市立商業学校 (現・県立岡崎商業高校) に入学するが、1923 年頃より結核を発病し、中途退学して卒業することはできなかった (桃山将「『試作』のことども」)。附属小学校で一年上級だった小野英一と当時から親交を結び、小野を通じて岡崎出身の近藤孝太郎 (1897 ~ 1949) に絵画と創作版画を学ぶ。近藤は関東大震災を機に帰郷し、岡崎市立高等女学校などで美術を教えるようになっていた時期である。近藤はフランスなどの海外勤務も経験し、持ち帰ったドイツの美術雑誌『ユエグント』等や版画同人誌『詩と版画』(旭正秀編) を二人に見せている。1925 年、小野と村松は版画同人誌『版画』を創刊。村松は「版画を始めて見たのは一年前の事で真実愛着を持つ様になった頃は去年の秋でした、以来版画に対する情熱は募るばかりで帰校後に鑿を持つ様な次第で追に版画創刊号を出すに到つたのです」と編集後記に記している。第 1 号 (1925.3) に木版画《エジプトの古画》(岡崎図書館) など 6 点、第 2 号 (1925.5) に木版画《立像》《山》《静物》《風景》の 4 点を発表。1925 年春、竜田町にアトリエをつくり、7 月 15 日に仲間を集めて版画競彫会を開く。また夏には蒲郡の東大塚海岸に家を借り、近藤や小野など友人を招き、昼は写生、夜は版画と精進を重ねた。その年、休刊していた地元の詩歌の同人誌『草原』と合併し、『版画』を版画と詩歌の同人誌『試作』(1925 ~ 1926 全 6 冊) と改題して創刊する。第 1 号 (1925.6) に《町へゆく路》《机上小景》など 4 点を発表したほか、終刊となった 6 号まで毎号 1 ~ 2 点の木版画を発表。また、近藤孝太郎らの主宰する洋画団体「我々の会」にも参加し、第 1 回展 (1926.4.14 ~ 20 岡崎市図書館) に油彩画《静物》など 8 点を出品。同年、絵画の勉強のために一時上京するが、病のため帰郷し、1928 (昭和 3) 年 12 月に結核のため自宅において 20 歳という若さで逝去した。【文献】『近藤孝太郎とその周囲』展図録 (岡崎市美術館 1983) / 桃山将「『試作』のことども 版画雑誌の誕生」『古本屋の蕋蓄 店主たちの書物談義』(燃焼社 1997) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

村山槐多（むらやま・かいた）1896～1919

絵画と文芸に独自の世界を示した大正時代を代表する異才である。1896（明治29）年9月15日神奈川県横浜市神奈川町に生まれた。弟は村山桂次。山本鼎は従兄。誕生当時、父は神奈川尋常高等小学校に勤務していたが、翌年高知県の中学校教員となり、一家で高知へ移住。その後、1900年に京都府の中学校へ赴任したため、槐多も少年期を京都で過ごす。1909年京都府立第一中学校に入学。早熟で詩や歌を作り、『日本少年』に投稿。また、学友と回覧雑誌『強盗』などを発行。在学中の1910年、鼎から油絵具を贈られ、絵の道に進むよう勧められる。版画も1913年には制作を始めていたようで、同年4月5日の消印のある鼎あての葉書には、「此頃木版をすこし作りました。その中で『春』『秋』と云ふ二枚を別便で出しましたから御笑ひ下さい。習作ですからその積で。普通の墨ですったんでダメになりました」とあり、木版画《春》《秋》を制作し、滞仏中の鼎に送ったことが判明する。また、11月に同校の図画担当教師加藤卓爾の提案で開かれた「図画展覧会」（9～13 京都府立第一中学校内）に《千曲川原》など9点の作品を出品したが、そのうちの《春》〔鼎に送ったものと同作か〕は木版画で、加藤に「一寸面白けれども未だ木版として充分の味ひ現はれず」（TK生「図画展覧会短評」『学友会誌』22 1913.12）と評された。さらに、12月に出版された同校の『学友会誌』第22号の表紙絵に槐多の木版画のカットが使われ、翌年3月にも木版画1点を制作している（『日記（1914.3.22）』『槐多の歌へる』）。1914年中学校を卒業し、上京。小杉未醒邸内の借家に寄寓し、日本美術院の研究生になる。同年9月17日の消印のある森谷南人子宛の葉書には、「僕は版画を四五点計画して居ますがもしなんならお送りしてもよございます」と書いているので、上京後も版画制作は続けていたようである。その後、10月の第1回二科展に水彩画《庭園の少女》など4点が入選し、画壇にデビュー。1915年2月には、油彩画《尿する裸僧》を制作したが、この異色の作品と同じ主題の木版画（柳瀬正夢田蔵）があり、柳瀬は油彩画に先行する作品だったという。以後の版画制作は不明。その後、10月の第2回再興日本美術院展に水彩画《カンナと少女》を出品し、美術院賞を受賞。1917年4月の第3回日本美術院試作展に油彩画《湖水と女》・素描《コスチュームの娘》を出品し、奨励賞を受賞。また、9月の第4回再興日本美術院展にも油彩画《乞食と女》を出品し、再び美術院賞を受賞。院友に推挙されている。1919（大正8）年2月20日流行性感冒による結核性肺炎のため、東京府豊多摩郡代々幡町で逝去。没後、「村山槐多遺作展覧会」（1919.11～30 銀座・兜屋画堂）が開かれ、詩や散文を集めた遺稿集『槐多の歌へる』（山崎省三編 アルス 1920.6）、『槐多の歌へる 其後及び槐多の話』（山本路郎編 アルス 1921.4）、『槐多画集』（山崎省三編 アルス 1921.11）が刊行された。【文献】『生誕100年 村山槐多展』図録（三重県立美術館 1997）／『没後90年 村山槐多 ガランスの快楽』展図録（渋谷区立松涛美術館 2009）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）（三木）

村山桂次（むらやま・けいじ）1899～1931

1899（明治32）年5月27日高知県土佐郡小高坂村に生まれる。兄は村山槐多。従兄に山本鼎。誕生当時、父は高知県尋常師範学校教諭だったが、翌年京都府立第一中学校へ赴任したため京都に移り、1909年退職。その後、

1915年一家で東京に移った。1917年か、中学校を卒業し、大蔵省に勤める（木下茂男宛山本鼎封書 1919.10.3付、一説に郵便局勤務とする）。1919年2月兄槐多、逝去。同年鼎が構想する「農民美術」の準備のため、吉田白嶺（日本美術院彫刻部同人 1871～1942）に師事して木彫を習う。12月「農民美術練習所」（長野県小縣郡神川村・神川小学校）が開所し、神川村に移る。同訓練所は1922年に神川村大屋に移り、「日本農民美術研究所」と改称するが、木彫部の講師として1928年7月頃まで勤務。受講生を指導するとともに、農民美術製作品展（1920.4～ 神川小学校ほか）・農民美術作品展示即売会（1920.5～ 日本橋・三越ほか）・夏期工芸学校（1925.8～ 研究所）などの開催にも尽力。その間、1922年に結婚か。1925年『アトリエ』第2巻第3号（1925.3）の特集「村山槐多を憶ふ」に「槐ちゃん」を発表。1926年には日本農民美術研究所の所員と顧問の美術家で結成された「九科会」の第1回展（2.2～8 日本橋・三越）に木彫《道化》《雪国の少女》《スキー人形》《青い鳥（10点組）》《ギニョール》（指人形）、刺繍《テーブル掛》、木工《小函》《巻笥箱》《額縁》など計17点を出品。また、同年夏に「木彫風俗人形頒布会」（アトリエ社主催）を開き、《農家の少女》《雪国の風俗》《田植の風俗》《養蚕の風俗》《スポーツ風俗》（各 大・小・群像の3種類）を制作した。その後、1928年春に河合卯之助・永瀬義郎らと「工房聯盟」（事務所は東京の旭方）を結成。7月か、農民美術研究所の縮小整理にともない研究所を去り、帰京。鼎と山崎省三の主宰する「芝絵画彫刻研究所」（1927.9～1929.9 芝区南佐久間町2ノ18 桜商会内）を手伝う。翌1929年自宅に「日本工芸美術研究所」を開設。また同年、鼎の依頼で吉田白嶺とともに粘土人形（その後、北原白秋が《ロシア人形》と命名し、農民美術研究所で制作）の見本を制作。1930年には第2回九科会展（1.24～28 日本橋・三越）に出品した。版画は、1928年1月の第8回日本創作版画協会展に木版画《スケート》、翌1929年1月の第9回展に《木曾踊》を出品している。1931（昭和6）年9月11日結核のため東京・芝の東京慈恵会医院で逝去。【文献】山越脩蔵編『山本鼎の手紙』（上田市教育委員会 1971）／小崎軍司『夜あけの星 自由大学／自由画／農民美術を築いた人たち』（造形社 1975）／『九科会第一回展覧会目録』（1926.2）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／『山本鼎のすべて展』図録（上田市立美術館 2014）（三木）

村山靚光（むらやま・せいこう）1901～1936

1901（明治34）年5月福岡県福岡市に生まれる。1924年上京。川端画学校で洋画を学び、前田政雄と交友。その後、時期は不明であるが結婚し、2年ほど北海道に住んだのち帰京。渋谷区代々木富ヶ谷町に住むか。前田によれば、「その時代々木に居を構へ盛んに油を描き版を作り 此の年初めて創作版画展に搬入幾点か入選した」（『亡き村山君を憶ふ』『日本版画協会々報』7）という。現時点では、日本創作版画協会展の目録には村山の名前は見当たらないが、1929年の第1回第一美術協会展には油彩画が入選したようである。翌1930年には、第17回光風会展に《朝風》（版画か）が入選。この年に版画部を新設した国際美術協会第2回内国美術展にも入選。また創作版画集『きつつき』（創作版画倶楽部）の創刊号（1930.7）に《都会風景》を発表した。この頃のことを第2回内国美術展の審査員を務め、『きつつき』の同人でもあつた平塚運一は、「村山君は相当古くから版画に手を染めてゐた

が、目立つた作品を発表するやうになつたのは昭和五年の国際美術展覧会出品の小さい作品あたりからだらうと思ふ。その絵は随分小さい画面だつたが、中々テキパキと所理した気持のいい、鮮やかな版画で、道が向ふへ細くなり、左側に棚や小さい並木があつて空が美しく澄んでゐたやうに記憶している。村山君の斯云ふ小品は大抵の場合確かで簡素な所理で成功してゐた」〔村山君の版画〕『日本版画協会々報』7)と記している。1931年も第8回白日会展に《都会風景》(目録には「テンペラ」とあるも『美之國』7-2の「第8回白日会展総評」では「版画」とある)、第6回国画会展に《広告塔のある風景》《河岸》、第12回帝展に木版画《橋》が入選した。1932年には日本版画協会会員に推挙されたが、出品は1935年になってからである。1933年から静岡にしばしば取材旅行に出かけ、1934年の第9回国画会展に《山上ノ雲》、1935年の第10回国画会展に《富士川べり》、同年の第4回日本版画協会展に《大宮八景之内 浅間神社》《大宮八景之内 狩宿の桜》《身延八景之内 御草庵の雪景》《身延八景之内 雨乞の瀧》《身延八景之内 奥院》《芦湖》《枯木》《八山下》を出品した。1936(昭和11)年1月5日東京で逝去。同年2月の『日本版画協会々報』第7号に村山の死亡記事、平塚運一の「村山君の版画」と前田政雄の「亡き村山君を憶ふ」と題する追悼文が掲載された。平塚は前出の文に続け、「君は非情に潔癖で、その刃物の切れ味、バレンの摺具合などに人の気のつかない多大の苦勞を傾けてゐたものらしく、その為に一寸した気持から仕上らなかつた版画も随分あつたらしい。／君は又、相当大作も手をつけてゐたのであつたが、非常に生一本な、そして、負けず嫌ひな村山君は、気の済むまで随分しつこく、ぐんぐんやつてゆくので、遂には、どうしても思ふやうにはいかぬと云つて止めるやうなことがあつたらしい。(略)最近頒布会を開いて大いに制作に元気が出、これに続いて「今年の国展には馬力をかけます」と云つてゐた処へまで行く訳だつたのが、急逝され、友人の淋しさは無論であるが、当版画界の損失〔で〕あると思ふ」と追悼している。その後、5月の第5回日本版画協会展に遺作(作品名は不明)が特別陳列され、米9都市を巡回した「日本現代版画展」(主催:日本版画協会 1936.7~1937.5)にも作品が並んだ。【文献】『日本版画協会々報』7(1936.2)／『渡米日本現代版画準備展覧会目録-第四回日本版画協会展-』大阪展目録(1935)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)(三木)

村山辰男(むらやま・たつお)

1929(昭和4)年の第9回日本創作版画協会展に木版画《待合室》を出品。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)(三木)

村山知義(むらやま・ともよし) 1901~1977

1901(明治34)年1月18日東京市神田区末広町に生まれる。父は医学士・海軍医。1906年静岡県沼津へ転居。1910年父が逝去。この年頃から、児童文学者でキリスト教伝道師の野辺地天馬(のちに『子供之友』編集者)に水彩画を習ひ、沼津の聖ヨハネ教会に通った。1912年東京に戻る。1913年開成中学に入學、同級に戸板潤・内田昇三らがいた。1914年図画教師より油絵具一式を譲られ油彩画を制作。1918年旧制第一高等学校に入學、同窓に戸板・内田のほか和達知男・久保栄・森五郎(のちの羽仁五郎)らがいた。哲学書のほか宗教・文学の書物に耽

溺する。1921年東京帝国大学文学部哲学科に進学するが、12月に退學、翌1922年1月ベルリンへ渡る。同地では和達や画廊「シュトゥルム」で知り合った永野芳光らと行動をとにした。同年3月ベルリン・ノイマン版画コレクションでの「大未来派展」に出品。5月「第1回デュッセルドルフ国際美術展」に出品。また進歩派の美術家を糾合する會議に参加して、ダダイストや構成主義者らアヴァンギャルドが會議を攻撃してデモンストレーションする様子を実見する。9月ベルリンのドワルディー画廊で永野との二人展を開催。この頃ニッディー・インペコフフェンのダンスを観て強烈な刺激を受ける。1923年1月末帰国。5月に神田の文房堂で「村山知義の意識的構成主義的小品展」を開催。木版画をベースとした表紙の目録を発行し、構成物や写真とともにエッチングもしくは木版の可能性がある《黄なき少女の復讐》を出品した。6月上落合の自宅で第2回個展、小石川・カフェ鈴蘭で第3回個展を開催。また、同月「マヴォ」を結成して7月に第1回展を開催、油彩画や構成物のほかに、木版による《展覧会への招待状》《裸女》《黄なき少女の復讐・4》《パンと曲馬》、エッチングによる《黄なき少女の復讐・3》を出品した。以降、1924年12月画廊九段で開催の最後のマヴォ展まではマヴォを拠点に、その後は1925年9月に三科が解散するまでは三科を拠点に、美術(絵画・構成物・デザイン)、演劇(演出・戯曲・装置・衣装)、舞踊、建築、文学(小説・詩・批評・翻訳)などを横断してアヴァンギャルド運動の中心作家として急進的な活動を展開した。この間、1924年7月に機関誌「マヴォ」を創刊。リノカットとインテルによるさまざまな太さの罫線、タイポグラフィ、写真図版などを縦横無尽に構成した過激な冊子を発行してシュヴィッターズやドゥースブルフ、リシツキー、ラヨシュ・カシャークなど多くのヨーロッパのアヴァンギャルド作家に送付、機関誌の交換を通じて連帯した。1924年10月までに全4号を発行、一旦休刊したのち、1925年6月から8月までに5号から7号を発行して、合計全7号を発行。1924年の発行時には「マヴォ・グラフィック」としてリノカットを制作・発行し、村山自身も第4集のために制作した。1925年9月の三科解散後は、プロレタリア芸術運動へと急傾斜し、その後演劇を中心にプロレタリア闘争を繰り広げた。1930年に検挙され、6ヶ月に亘って拘留、1932年にも検挙されて1年7か月拘留された。1935年に転向小説とされる『白夜、劇場』を刊行したが、その後も新協劇団や前進座を拠点に演劇活動し、1940年8月に3度目の検挙、1942年6月まで拘留された。戦後は、1946年に新協劇団を再建、その後1959年には東京芸術座を結成して演劇界の中心人物として活動した。1977(昭和52)年3月22日東京で逝去。【文献】村山知義『演劇の自叙伝』1~4(東邦出版社(4巻のみ東京芸術座) 1970~1977)／『大正期新興美術資料集成』(国書刊行会 2006)／『すべての僕が沸騰する 村山知義の宇宙展図録』(読売新聞社・美術館連絡協議会発行 2012)(滝沢)

村山秀美(むらやま・ひでみ)

1929(昭和4)年1月の第9回日本創作版画協会展に木版画《千代の松原(1)》《千代の松原(2)》《北海道の雪景》を出品。また、平塚運一門下による版画誌『版』の第2号(賀状号 1928.1)に《年賀状》、第3号(1928.3)に《春訪る》、第5号(1928.11)に《北海風景》、第6号(蔵書票号 1928.12)に《蔵書票》3点、第7号(賀状号 1929.2)に

《年賀状》、第8号(1929.7)に《年賀状 伊勢エビ》を発表した。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『創作版画誌の系譜』(三木)

室 順治(むろ・じゅんじ)➡斎藤治良(さいとう・じろう)

室谷早子(むろや・はやこ)

台湾に生まれる。本名は室谷早。1935(昭和10)年5月に台北で立石鐵臣・西川満・宮田弥太郎らによって結成された「創作版画会」に参加。版画の発表は未確認。その後、上京し、女子美術専門学校師範科洋画部に学ぶ。在学中、1939年の第14回国画会展に油彩画《貝がら》、翌年の第15回展に《海岸風景》が入選。出品時は東京市杉並区高円寺に住む。1941年3月同校を卒業し、常磐松女学校の美術科教員となる。1943年の第18回国画会展にも《チューリップ》が入選。戦後も常磐松学園に勤め、戦災により被害を受けた同学園の復興に尽力したという。【文献】西山純子「華麗島の創作版画——一九三〇年代・台湾——」『採蓮』7(千葉市美術館 2004)／『会員名簿』(女子美術同窓会 1954)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)(三木)

【め】

女麻 卓(めあさ・たく)

岩手県松尾村の松尾鑛山小学校に松尾鑛山常務中村正雄よりエッチングプレス機及び用具一式が寄贈され、1937(昭和12)年9月4・5日の両日、西田武雄を講師に招いてエッチング講習会が松尾鑛山小学校で開催された。その間の消息(「受講の記」)を『エッチング』59号(1937.9)に寄稿。また、その時に制作したと思われるエッチング《[ダリア]》が『エッチング』60号(1937.10)に掲載される。なお、同誌掲載のエッチング作品の作者名「女鹿卓」は「女麻卓」の誤記と思われる。【文献】『エッチング』59・60(樋口)

目時正五郎(めとき・しょうごろう)

西田武雄主宰日本エッチング研究所機関誌『エッチング』(1932～1943 全125号)の第39号(1936.1)と第51号(1937.1)の賀状紹介欄に木版画の年賀状が掲載されている。また、第4回東奥美術展(青森市公会堂ほか1934.10.14～17)の一般展部門に、油彩画と思われる《風景》《静物》《眼鏡のおちさん》を出品。当時は青森県下北郡大間村に在住。【文献】『エッチング』39(加治)

【も】

毛井俊一郎(もうい・しゅんいちろう)

版画同人誌『彫りと摺り』(1931～1933 8冊)の主宰者武藤完一は1933年8月に版画講習会(講師:平塚運一大分県師範学校)を開催し、これを機に創作版画を九州全土に広める意図で『九州版画』(1933～1941 全24冊)と改題する。1935年にも版画講習会(講師:平塚運一 8.1～5)を開催し、『九州版画』の第8号(1935.10)を講習会記念号として発行。毛井はこの8号に《ニコライ堂》を発表していることから、この講習会に参加していたと思われる。その後、第9号(1936.1)に《鎮守の森》、第13号(1937.1)に《田家雪》を発表している。1942年には台北州板橋国民学校の訓導となり、戦後1965年から1968年まで大分の旧山香中学校の校長を務めた。【文献】

ネット検索「旧山香中学校 卒業新聞『往還』の歴史」／ネット検索「昭和17年台北州板橋国民学校」／『創作版画誌の系譜』(加治)

最上忠敬(もがみ・ただたか)

1931(昭和6)年頃から1935年にかけて制作したと思われる木版28図(賀状含む)の貼り込み帖を確認。《天幕生活》(1932.8)、『鉄青年』創刊号(1932.12)の表紙、《曉鶏聲》(賀状 1932.12)、『戦ひはこれからだ!!』(1933.5)、『今様女人曼荼羅』(1934.10～1935.1)など主に軍人や戦地の風景・風俗が題材。1906(明治39)年頃は第16師団輜重兵第16大隊大尉で、また1931年の最上春〔生〕宛葉書の住所は「東京市小石川小日向台町三―二一(或は七一)」で、同地に在住あるいは実家住所、どちらかと推定。【文献】『版画堂』目録91号(2011.3)(樋口)

茂木圭一郎(もぎ・けいいちろう)

1924(大正13)年に銅版画家・高羽敏(本名貞敏)が兄・貞夫と共に大阪で発行した歌と版画の雑誌『同心草』(同心草舎 大阪市住吉区天王寺町621 高羽貞夫内)の第Ⅷ号(1926.7)に木版画《SAKIKO 像》を発表している。当時は『同心草』維持会員で、経歴は不明。【文献】『同心草』Ⅷ(1926.7)(樋口)

黙 仙(もくせん)

菊池幽芳『無言の誓』(1894 駁々堂)、徳田秋声『自由結婚』(1902 駁々堂)、水谷不倒『にが笑ひ』(駁々堂 1902)、大沢天声『恋の短銃』(1903 駁々堂)、中村春雨『雛鳥』(金尾文淵堂 1901)等の木版口絵や村上浪六の小説の石版口絵の下絵を描く。経歴は不明。【文献】山田奈々子『木版口絵総覧』(文生書院 2005)(樋口)

望田 権(もちだ・いさむ)

大正期(1919～1920頃)に木版画譜の表紙絵を描く。詳細は不明。【文献】『山田書店新収目録』40(2000.4)(樋口)

本方秀麟(もとかた・しゅうりん) 1881～1932

日本画家。1881(明治14)年2月石川県に生まれる。本名は昌。垣内雲麟に師事。1913年新俳画運動をおこし、雑誌『新美術』『美術公論』などに美術評論を執筆する。『美術週報』第2巻第34号(1915.5)の広告欄に「自刀版画 横一寸、縦四尺五寸 実費を以て同好者に配布す。四谷区坂町百二十七番地」の広告を掲載。伊藤月草編『俳画講座』(俳画講座刊行会 木版50図入 6冊)にも執筆。1932(昭和7)年9月22日逝去。【文献】『美術週報』2・34(美術週報社 1915.5)／デジタル版 日本人名大辞典+Plus「本方秀麟」解説(樋口)

望月要治(もちづき・ようじ)

長野県安曇郡の小学校教師たちは、教育者・版画家として活躍していた郷里の先輩武田新太郎を顧問に迎えて「黄樹社」を組織し、版画同人誌『黄樹』(1937～1938 全2冊)を発行した。その創刊号(1937.3)の会員名簿に掲載されているものの、版画の発表はない。当時、北安曇郡七貴小学校に勤務。【文献】『黄樹』2(加治)

元井三門里(もとゐ・みどり) 1885～1956

1885(明治18)年11月28日大分県臼杵福良に生まれる。1910年に上京し、洋画を学ぶ。病を得て大分に一時帰郷し、再び大阪に出て、日本画勉強のため京都に移る。陶器の

絵付けに携わる傍ら、菊池素空に日本画を学ぶ。1919 年頃に古美術商で古渡更紗を見て興味をおぼえ、1921 年には『主婦の友』に絵更紗の描法を、1922 年には『週刊朝日』に「絵更紗の作り方」を掲載。また主婦の友主催で絵更紗の講習会も行なった。同年 10 月に京都に「更紗画塾」を設立。1923 年頃よりは絵更紗の展覧会を京都や神戸、大阪、東京などで開催し、生涯これ続ける。1925 年には「更紗画塾」を「絵更紗画塾」と、さらに 1931 年に「絵更紗画林」と改称する。1934 年の大正記念京都美術館美術展覧会（51～25 京都市美術館）美術工芸部門に《御召列車の御通り屏風》を出品。1953 年 10 月に京都市美術館で「三十周年絵更紗記念展覧会」を開催。1956（昭和 31）年 11 月 1 日逝去。著書に『絵更紗の描法』（京都書院 1956）があり、没後に『絵更紗：元井三門里遺作集』（光琳社出版 1968）が出版されている。版画制作については神戸・版画の家が発行した『HANGA』第 9・10 合併輯（1926.7）に木版画《大原女》を発表。【文献】『年譜』『絵更紗：元井三門里遺作集』（光琳社出版 1968）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／『創作版画誌の系譜』（加治）

本橋華門（もとはし・かもん）

『中央美術』6 巻 8 号（1920.8）の「美術界消息」によると、1920（大正 9）年 7 月、渋谷宮益坂下トンボヤに於いて「本橋〔華門〕齋藤〔種臣〕二氏版画会」（3～13）が開催され、両氏の「自画自版画を展覧す」とある。また『美術月報』1 巻 12 号（1920.8）にも「本橋齋藤二氏版画第二回展」（日時会場は同様）とあり、両氏が少なくとも版画展を 2 回開催したことが知られる。作品は未見。【文献】『中央美術』6-8（1920.8）／『美術月報』1-12（1920.8）（樋口）

百瀬 渥（ももせ・あつし）1901～1965

1901（明治 34）年 4 月 15 日長野県東筑摩郡に生まれる。1924 年 3 月東京美術学校図画師範科を卒業し、4 月から 1925 年の夏まで約一年半の間、大分県立三重高等女学校に図画教師として勤務する。1929 年に長野県師範学校第二部を修了。1933 年には東京市牛込区津久土小学校の教員となり、1934 年 4 月から 1936 年 3 月までは長野県木曾中学校と木曾高等女学校を兼任、1936 年 3 月から 1941 年 6 月までは伊那中学校、1941 年 10 月から松本女子師範学校、1942 年 4 月から 11 月は松本第二高等女学校の図画教師を勤め、1943 年 4 月からは長野師範学校女子部の教授を勤めた。戦後は 1949 年 6 月から信州大学教育学部の助教授も兼任し、1950 年 4 月からは信州大学教育学部（松本分校）の教授となった。1965（昭和 40）年 2 月 28 日逝去。1943 年当時は松本市徒士町 375 に在住。

版画関係は、三田秋作と東京美術学校図画師範科同期の小林澄心の 3 人で版画同人誌『UA!』（1929 全 10 号）、その継続誌『版画狂』（1930 全 4 号か）を発行し、木版画を発表する。『UA!』第 1 巻 1 号（1929.1）には《福寿草》、第 1 巻 2 号（1929.2）に《チューリップ》をはじめとして第 1 巻 6 号までと、第 1 巻 8 号～10 号（1929.12）まで作品を発表（第 1 巻 7 号未見）。その継続誌『版画狂』（毎号タイトルの漢字表記が異なる）の『版画経』第 2 巻 3 号（1930.10）に《〔獅子頭〕》、《数寄屋橋》、『版画京』第 2 巻 4 号（刊行年不明）に《〔駅前〕》、《〔牛〕》を発表する。1933 年の夏休みに西田武雄の主催するエッチング研究所主催「第 1 回エッチング講習会」に参加。その時の制作作品と思われる銅版画が研究所機関誌『エッチン

グ』第 11 号（1933.9）に掲載されている。その後、日本図画手工協会主催「第 1 回郷土を描く」展覧会（1934.2.1～7 日本橋・白木屋）に木版画《数寄屋橋》を発表。この作品は上記『版画経』2 巻 3 号の《数寄屋橋》と同じ作品。その後、武井武雄主宰の版画による年賀状交換会「榛の会」の第 9 回（1943）から第 12 回（1946）まで参加となっているが、11・12 回は病気を理由に参加していない。【文献】『UA!』1-1～6・8～10／『版画経』2-3／『エッチング』10・11／『信州大学教育学部三十年誌』（信州大学教育学部三十年誌刊行会 1982）／市道和豊『「奇跡の成立」榛の会昭和 21 年―芸術集団の戦中・戦後―』（室町書房 2008）／金子一夫編『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究報告 第 1・2 部』（金子一夫 2016）（加治）

森 源太郎（もり・げんたろう）

1928（昭和 3）年の第 8 回日本創作版画協会展に木版画《北海の鰯晴れ》が入選。翌年の『版画 CLUB』第 1 年第 3 号（1929.5）には《失題》の図版が掲載された。この作品は、同誌の「CLUB 紙上展 第一回」に応じたもので、選者の恩地孝四郎は「少し雑作なくやりすぎましたね、なかなか慣れた巧みさを見せてゐますが、一寸、たゞそれだけのやうな気がしやしませんか、雲にあみ目を入れたりした所、運一氏張りで気がさいてゐますが右手の葉込みの辺りコマスキーねぢりの累ねは少し気をきかしすぎたらしい。石垣めきますね。それとも石垣かしら。この方、これだけ所理がつくのなら、一つづつくり腰を据えてかゝつて頂いたら甚だいゝのだと思ひます」と評している。また、『版画 CLUB』第 2 年第 1 号（1930.1）に展評「卓上社第二回展瞥見の記」を寄稿した。寄稿時は世田谷に住む。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／『版画 CLUB』1-3・2-1（三木）

森 守明（もり・しゅめい）1892～1951

1892（明治 25）年 6 月 17 日伏見稲荷神社（現・伏見稲荷大社）社家の次男として京都に生まれる。本名は守明（もりあき）。1910 年京都市立美術工芸学校図案科、1923 年京都市立絵画専門学校別科を卒業する。西山翠嶂に師事し、画塾青甲社に学ぶ。絵画専門学校在学中の 1922 年、第 4 回帝展に《遊仙洞》が初入選。以降は帝展に毎回出品を続け、第 8 回展（1927）《雨後》、第 11 回展（1930）《弘法大師》で特選となる。官展へは 1944 年の戦時特別文展まで出品を続けた。制作の傍ら画塾青甲社の中心的存在として活動のほか、1926 年より母校の市立美術工芸学校、1940 年からは市立絵画専門学校で後進の指導にあたる。1951（昭和 26）年 7 月 11 日京都で逝去。堂本印象は義弟。版画は、京都の新進日本画家 22 名を集めて刊行された木版画集『新進花鳥画集』（マリア画房 1931～1933 全 36 図）に《水仙》《白百合》《椿》の木版画 3 点を制作。【文献】『日本美術年鑑』1952 年版（東京文化財研究所 1953）／『新進名家花鳥選』上・下巻（株マリア書房 1987）／『山田書店新収美術目録』81（2008 春）（樋口）

森 春鳥（もり・しゅんちょう）

名取春仙門下の日本画家。1939（昭和 14）年春仙画塾の川口春波・神谷道緒・若村霊峰・大森千章等とともに永日社展（伊勢丹）に出品。日本劇画会会員。第 2 回聖戦美術展（1941.7）、第 2 回大東亜戦争美術第 2 回展（1943.12）に出品歴あり。戦前の制作と思われる木版画《月

明の弘前城》(大鈴舎版)1図が知られる。【文献】『浮世絵と現代版画』目録21(菟堂 1988.7)／『名取春仙 櫛形町立春仙美術館所蔵名取春仙作品目録』(2002)(樋口)

森 大造(もり・だいぞう) 1900～1988

1900(明治33)年4月15日滋賀県阪田郡醒井村上丹生に生まれる。兄の下で社寺の飾り彫刻などを学ぶ。1922年東京美術学校彫刻科木彫部選科に入学し、関野聖雲(1889～1947)に師事。1926年の第1回聖徳太子奉讃展に彫刻《立てる女》が入選。版画は、在学中に校友会活動として始めたようであるが、現在確認できるのは、卒業後の1928年に同校で開かれた「椎ノ樹会第1回創作版画展」(2.17～18 講堂入口)と「椎の樹会第3回展」(6.15～16 講堂入口)である。第1回展に《親心子心》《浴室》《小春》、第3回に《丸の内所見》《姉妹》《小供等は語る》を出品した。1927年同校を卒業。同年の第8回帝展に彫刻《秋華》が初入選。以後官展作家の道を歩み、第9・10・12～15回帝展(1928・1929・1931～1934)に出品し、第15回展の《工場の午後》で特選を受賞。昭和11年文展招待展(1936)出品を経て、1937年の新文展発足と共に無鑑査となり、第1～4・6回展(1937～1941・1943)に出品。またその間、1933年には東京美術学校を卒業した関野聖雲門下の木彫家らと研究団体「九元社」を結成した。戦後は、1950年の第6回日展に出品したが、翌1951年に奥山泰堂・中野四郎・村井辰夫とともに「九元社」の流れを継ぐ彫刻団体「創型会」を設立。翌1952年から展覧会を開催し、以後同展に作品を発表。また、1954年には「仏教美術協会」を組織した。1988(昭和63)年8月5日東京都世田谷区奥沢で逝去。【文献】伊藤伸子「東京美術学校校友会版画部 1928-1933」『日本近代の青春 創作版画の名品』展図録(和歌山県立近代美術館・宇都宮美術館 2010)／『校友会月報』26-8・27-3(東京美術学校校友会 1928.3・1928.7)／『日本美術年鑑』平成元年版(東京国立文化財研究所 1990)／『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻』(ぎょうせい 1997)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)(三木)

盛 忠七(もり・ちゅうしち) 1901～1956

1901(明治37)年青森県西津軽郡森田村に生まれる。青森県黒石町で安藝靖一が中心となって発行した版画同人誌『はなが』の第2号(1933.2)に《みかん》、第3号(1933.3)に《雪の林》を発表する。創刊号は未見。この1933年には文部省教員検定試験で免許を取得し、1934年から1940年まで八戸中学校で図画教師のほかに習字算数も教える。1940年から1943年には青森県弘前高等女学校で図画教師を勤めるが、1942～43年にかけては弘前和洋裁縫女学校も兼任する。1934年の第4回東奥美術展(10.14～17 青森市公会堂など)の洋画部門に《仏が浦》、第5回展(1935.10.17～20 青森市公会堂など)に《窓際の静物》を出品する。戦後は1948年の第1回示現会展に油彩画で佳作賞を受賞し、会員となる。また、1950年の第6回日展に油彩画が入選。その後も第8回展(1952)、第12回展(1956)に入選した。1957(昭和32)年11月青森県で逝去。【文献】『はなが』2・3(1933.2・3)／『創立50周年 示現会記念誌』(示現会 1997)／金子一夫編『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究報告 第1部』(金子一夫 2016)(加治)

守 洞春(もり・どうしゅん) 1909～1985

1909(明治42)年10月12日岐阜県高山町馬場町に生まれる。本名は守造。1924年に高山西尋常高等小学校(現・高山市西小学校)を卒業し、名古屋市枇杷島のマルワ呉服店に勤務。この枇杷島時代には、版画・本画・書道・俳句などに興味を示した。画号の「守洞春」は、当時、俳句を「春水」と号して『名古屋新聞』に投句したおり、掲載の手違いで「守洞春」になっていた。これは面白いと思ってそのまま拝借し定着したとのことである。さらにこの枇杷島時代に料治朝鳴の指導を得て版画制作の第一歩が踏み出された。1932(昭和7)年には料治が主宰する『白と黒』誌の第30号(1932.12)に《自画像》を発表し、以後第31・34・36・38・39号(1933.1～1933.9)に作品を発表する。さらに同年には『版芸術』第9号(1932.12)に《年賀状》を発表して以来、第15・19～21・58〔終刊号〕(1933.6～1936.12)に作品を発表する。以後、料治朝鳴の「白と黒社」との関係は、『土俗玩具集』(1935.4 創刊)、『おもちゃ絵集』(1936.3 創刊)、『版画蔵票』(刊年不詳)等に作品を発表する等して深めて行く。1934年にマルワ呉服店を退職し、郷里高山に戻り呉服商を始める。1935年には武井武雄主宰の年賀状交換会「榛の会」に参加し、第2回(1935)から第20回(1954)まで連続参加する。1937年に平塚運一に師事し、創作活動に力を入れる。翌年には出身地の飛騨高山で、守を中心に「ひだ版の会」が結成され、版画同人誌『版あ』を発刊し、装幀を担当する。1939年には第14回国画会展に《高山陣屋跡》、第8回日本版画協会展に《山峡暮雪》《前庭》《粟の穂》を出品。以後、日本版画協会展には第11・12・13回展(1942～1944)に出品し、1943年の第12回展で会員に推挙された。翌年、清永完治が中心になって朝鮮(釜山)で結成された「朱美の会」に参加し、『朱美之集』第1冊(1940.5)に《高山別院(飛騨十景ノ一)》を発表し、以後第5冊(1942.8)まで続ける。同年(1940)7月には『飛騨毎日新聞』に「版画随筆」連載。1941年に呉服商を廃業。版画制作に専念し、「飛騨美術協会」創設する。1941年の第4回新文展に《ろくろの窓》、第16回国画会展に《桶の並ぶ風景》を出品。1942年には版画《切り通し》を制作し、海軍省に献納。同年、美術家連盟会員に推挙される。また第10回東光会展に《御米蔵風景》《高山祭鬨鶏楽》《飛騨の街》を出品し、《高山祭鬨鶏楽》が授賞。以後、東光会展には、不出品の時もあったが、1980年の第46回まで出品を続けた。1943年に版画《護国の神苑》を高山市遺族会に贈呈慰問する。上京し、陸軍省整備局分室に勤務。杉並区高円寺に住む。同年の第11回東光会展で無鑑査に推挙される。「日本版画奉公会」「日本美術報国会」会員となる。この頃、住まいの関係もあってか、恩地孝四郎・斎藤与里に師事するとともに、関野準一郎とも交遊する。1944年、『日本版画』第133号に《吃了飯了麼》を発表。陸軍省より依頼されていた《蒙古襲来の図》が完成し、斎藤に激賞される。またこの年に東光会会友に推挙され、恩地が主宰する一木会にも参加、『一木集』の第I回(1944.9)に《初夏の庭》を発表し、以後、第VI回(1950.12)の終刊まで発表を続ける。1944年9月には母の願いで帰郷し「飛騨日本画文化協会」創設に参加。1946年日本版画協会同人連作自刻版画集『日本民族図譜』(富岳本社刊行 高見沢木版社摺)に《飛騨の七夕祭》を制作。同年秋の第2回日展に《楽人(飛騨の鬨鶏楽)》を出品し、以後は不定期ではあるが同展に出品を続け、1976年には会友となる。1948年に「岐阜県美術展」会員となり、翌年に

は「黄玄会」を創設する。1951年に『岐阜タイムス』に「飛騨の春」を連載する。又同年には、飛騨地区の小・中学校で版画制作の講師を勤め、地域での版画普及活動に力を注ぐ。1956年には今までの文化活動が認められ、高山市制二十周年記念で表彰される。1959年に第1回「守洞春版画展」を岐阜で開催、1961年の第3回展まで続ける。翌年「日本板画展」会員となる。1964年には「守洞春版画個展」を名古屋で、「守洞春版画展」を岐阜で開催する。1966年に「岐阜県芸術文化会議」会員に、更に「岐燦会展」会員となる。1970年に1月から『中日新聞』に「飛騨の民具」を、3月からは同紙に「飛騨の風物民具」を連載する。翌年に「守洞春と飛騨版画展」、1976年にも同展を岐阜で開催する。1975年に「教育文化東海テレビ賞」、翌年には高山市制四十周年に「芸術文化顕彰」を受ける。更に1980年に「岐阜県水墨画協会」名誉会員となった。1985(昭和60)年8月8日岐阜県高山市で逝去。【文献】『守洞春版画作品集』(高山市民時報社 1987)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『創作版画誌の系譜』(河野)

森 典子 (もり・のりこ)

『エッチング』26号(1934.12)に白樺の小径を描いた『風景』が図版掲載された。当時、神奈川県女子師範学校生。【文献】『エッチング』26 (樋口)

森 夜潮 (もり・やしお) 1904～1993

1904(明治37)年大分県日田郡に生まれ、九重町に転籍する。本名は祥夫。1921年日田郡立工芸学校(現・大分県立日田林工学校)描金科を卒業し、日田漆器株式会社に勤めながら母校の実習教員(漆工芸)を務める。1925年に京都へ出て、蒔絵師迎田秋悦の漆芸塾に入門するが、1933年師秋悦の逝去に伴い塾が解散したため、翌年上京。1938年に日田に戻り、母校の実習教師としてに復職し、漆工芸を教える。後に教諭となり、1965年に退職。俳人としても知られる。漆工芸作家として紀元2600年奉祝美術展(1940)や第6回京都市美術展覧会(1941)に出品し、戦前・戦後を通じては国画会の工芸部門や日本漆工芸展に、戦後は光風会展・日展などに出品。1978年に日田市文化功労者、1981年には黄綬褒章を受章。1993(平成5)年に日田で逝去。版画制作では、大分県日田町で宇治山哲平が中心となって発行した版画同人誌『朴の木』第1号(1933.4)に《夢》を発表したことは判明しているが、作品は未見。【文献】『大分県出身作家調査報告書 昭和55年』(大分県立芸術会館 1981)／『大分県歴史人物事典』(大分合同新聞社 1996)／『創作版画誌の系譜』(加治)

守 兼 (もりかね) ➡ 成田守兼 (なりた・もりかね)

森川蕉亭 (もりかわ・しょうてい)

村上浪六『むら時雨』続(駁々堂 1903)の木版口絵の下絵を描く。経歴不詳。【文献】山田奈々子『木版口絵総覧』(文生書院 2005) (樋口)

森口隼人 (もりぐち・はやと)

昭和初期の代表的な版画同人誌『風』(1927～1928 全4号)は澤田伊四郎によって創刊された。その第4号(1928.7)に《女とネコ》《裸体習作》《夏》《踊り子》の木版画4点を発表。その後1930年頃に森口は白井栄一と二人で版画集『木馬』を発行する。現在、発行が確認さ

れているものは昭和5年5月の日付がわかる号数の無いものと第三版画集(1930)と第10号の3冊である。昭和5年5月(1930.5)の日付がわかるものには「今度の版画集は私一人を出してしまいました。そうして一つ一つ画だいを付けづ初めのベズにある平太(ママ)な俳句にてすべての画だいたしします。昭和5年5月 森口隼人」とあり、森口の個人版画集として発行されたことがわかる。その号(1930.5)にタイトルの無い木版画が7点、第三版画集(1930)に《風吹く郊外》《ガラス器》《思ひ》《酒壺と女》《かたつむり》、第10号(刊行年不明)に《都会の屋上》《カレヒ》《水鏡》《花と少女》《散歩する狂人》の5点を発表。なお、確認された第10号には小野忠重らの新版画集団へ献呈された旨が記されているため、新版画集団が解散する1936年までには発行されたと推測され、もう一冊確認された10号では文楽人形の木版画を版画同人誌『白と黒』や『版芸術』に発表している船本茂一に献呈している。また、第三版画集(1930)は2冊確認されていて、一冊は諏訪兼紀に、もう1冊は深澤索一に献呈されていることから、当時の版画家たちとの交流も推測される。当時、森口は「東京市下谷区金枝下町102」に、白井は「東京市浅草区芝崎町15」の近距離に住まいがあり、行き来していたことが予想できる。その後の消息などは不明。【文献】『木馬』号数不明・3・10／『創作版画誌の系譜』(加治)

守口 光 (もりぐち・こう)

1928(昭和3)年、守口基隆主宰・村上力編輯の版画誌『ネヴェロン NEVERON』第1号(1928.4)に《試作(1)》《京橋より》など4点の単色木版画を、第2号(8月)に《工場》《風景》の2点の同様の木版画を掲載した。そのほかの活動については不詳、また守口基隆との関係も不明。【文献】『創作版画誌の系譜』(滝沢)

守口基隆 (もりぐち・もとたか)

1926(大正15)年8月、金熙明が主宰するアナーキズム文芸雑誌『野獣群』の創刊に際して「守口元隆」の名で編集同人となり、階級闘争への志向を見せる。翌1927年1月発行の同誌第2巻第1号にも名を連ねる。その後、東京市外渋谷町羽沢にモリス社を主宰し、1928年に版画誌『ネヴェロン NEVERON』を発行する。同時に自らも木版画を制作し、同誌第1号に白と黒による明快なコントラストの《ラヴ・シイン》《工場のある風景》など4点の木版画を、2号に《日傘》《試作》の2点の同様の木版画を掲載した。1931年に写真と読み物の雑誌『モダン風』(モリス社)を創刊した。【文献】『創作版画誌の系譜』(滝沢)

森澤兼三 (もりさわ・けんぞう)

徳力富吉郎に木版画を学び、徳力の主宰する丹緑会編の『版 小品集』(発行年不明)に多色木版画1点(作品名不明)を発表。公募展へは、1933(昭和8)年の第4回京都工芸美術展に木版画(作品名不明)、第3回日本版画協会展に《水門風景》(ただし、目録には「謙三」とある)が入選。翌1934年も第9回国画会展に《静物》、第5回京都工芸美術展に《堺風景》(『みづゑ』353に図版掲載)が入選した。なお、国画会展出品時は、「京都市伏見区新町十二丁目」に住む。【文献】岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府総合資料館紀要』12(1984)／『版 小品集』(丹緑会編 発行年不明)／『みづゑ』353

(1934.7) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) (三木)

森田乙三洞 (もりた・おっさんどう) 1895 ~ 1959

1895 (明治28) 年2月21日奈良県に生まれる。本籍は添上郡樺本町大字蔵之庄 (現・天理市)。本名は政信、乙三洞と称す。1910年母キヨ逝去、翌1911年に父政吉が再婚すると、明治末頃に大阪市に転居。1913年東井トミと結婚し、翌1914年に大阪楽天地南横に古書・郷土玩具・民俗人形などを商う美術書籍の店「乙三洞書店」[オッサン堂書店とも称す]を開業する (東京で「オッサン、オッサン」と呼ばれていたことに由来するらしい)。1924年7月2日、岸田劉生が大阪の美術商森川喜助らと連れ立って心斎橋筋に出向き、「オッサン堂といふ[店]」に立ち寄ったと『劉生日記』に記す (『ある日の心斎橋』『劉生日記』5 岩波書店 1984)。長崎の富豪で南蛮美術の愛好家・永見徳太郎も「道頓堀の花園」(『柳屋』35 1928.5)で、「道頓堀を真中にして、三人の愉快的な知人が、私には有る。一人は柳屋主人三好米吉君、一人はビードロ博士で通る三隅君 [三隅貞吉]、もう一人は楽天地裏の本屋のおっさん。(中略) 此三人は、私の大阪に於ける最も好きな人、親しひ人、悪友でもある」と森田を紹介している。一方で、森田は木版画を能くし、齋藤昌三らが中心になって作った蔵書票の交換会「日本蔵書会」に第1回 (1922.7「蔵書票の会」と呼称) から第5回 (1928.4) まで『自画像』『魔の手』『夢』『対話』『がいこつ』その他を発表 (第1回は「小田育司」票を制作。第2回以降は小田育司と自票を発表。第5回では会員より制作を請け負う執筆 [図案] 画家に指定される)。京都の郷土史家で趣味人の田中緑紅が主宰する「年賀状交換会」に『ビリケン兎』(1927頃)、川崎巨泉らが組織した「浪華宝船会」に自画自刀自摺の『天下泰平宝船』(1929)・『乙三洞宝船』(1931)、浪花贅六庵らによる宝船絵巻書交換会「宝葉会」に『七偏人彩華洲宝船』、その他にマチス風『裸婦群像』や『太陽と骸骨』等々、ユーモラスでモダンだが何処かにアヴァンギャルド的な雰囲気を持った蔵書票・年賀状・宝船の作品を木版や謄写版で制作する。三好米吉の依頼か、『柳屋』第35号 (1928.5) に挿画『夜のカフェー』を、『柳屋』42号・考現の巻 (柳屋画廊 1931.3) では、表紙・裏表紙を柳屋画廊があった八幡筋昼屋町界隈を見開きで描いている。また、乙三洞の顧客で民俗資料や人形蒐集で知られる大阪の趣味人・岸本五兵衛 (摂津貯蓄銀行頭取) の私家版『子寿里庫 [ねずりこ] 叢書』第1~4篇 (1937~1945) に関わり、第1篇『天王寺の蛸々眼鏡』(1937)、第2篇『異国虎玩具図絵』(1938)、第4篇『貯金箱』(1940) では、岸本が描く表紙・挿絵を乙三洞が木版に彫摺し手彩色している (未見)。店舗は1931年南区難波新地4番町28番地 (現・中央区難波3-6)、1944年には前年 (1943) 没した三好米吉「柳屋」の建物 (南区豊屋町14番地) に移転するが、1945年3月の空襲で焼失。戦後は同年9月頃に、岸本の援助で南区安堂寺橋通り4丁目の岸本の持ち家を借りて再開、その後1951年に南区鰻谷中之町11番地 (現・中央区東心斎橋) へと移転し、晩年まで古書店主として活動した。1959 (昭和34) 年7月15日大阪で逝去。【文献】『柳屋』35・42 (柳屋画廊 1928.5・1931.2) / 橋爪節也『森田乙三洞』『新葉書本撰』第参号・第四号 (中尾書店 2007.1・7) / 市道和豊『乙三洞の芸術』(室町書店 2015) / 橋爪節也「しゅみじん」のまち・大阪レビュー』『上町台地 今昔タイムス 2017 April』号外 (上町台地今

昔フォーラム vol.7 Document 大阪ガス エネルギー・文化研究所 (CEL) 2017) (樋口)

森田晃吉 (もりた・こうきち)

『エッチング』4号 (1933.2) に木々の風景を描いたペン画、7・9・13号 (1933.5・1933.7・1933.11) に木々や民家の風景を描いたエッチング3点が図版掲載され、22号 (1934.8) によると、1934年8月に大分県師範学校主催のエッチング講習会 (1~5) に参加している。当時、大分県師範学校4年在学。【文献】『エッチング』7・9・13・22 (樋口)

守田千穰 (もりた・せんしゅう)

1937 (昭和12) 年7月、西田武雄を招いた福岡エッチング講習会に参加、その時に制作したと思われるエッチング《[野菜2種]》が『エッチング』58号 (1937.8) に掲載されている。当時、福岡県京都高等女学校教員で、同県京都郡元村在住。【文献】『エッチング』58 (樋口)

森田卓次郎 (もりた・たくじろう)

1931 (昭和6) 年の第1回日本版画協会展にエッチング《スケッチ》が入選。その後も、第2回展 (1932) に《風景》《自画像》(各エッチングか)、第3回展 (1933) にエッチング《浜川崎の印象》、第4回展 (1935) にドライポイント《静物》とエッチング《風景》を出品した。第4回展出品時は川崎に住む。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) (三木)

森田恒友 (もりた・つねとも) 1881 ~ 1933

1881 (明治14) 年4月9日埼玉県大里郡玉井村 (現・熊谷市) に生まれる。画家を志して1901年に上京、中村不折の夫人が隣村の出身だった縁から不折に師事。不折の留学により、その紹介で小山正太郎に入門、不同舎に学ぶ。1902年東京美術学校西洋画科選科入学、同期に山本鼎がいた。1903年頃、青木繁を中心とする熊谷守一や村上為俊、正宗得三郎、坂本繁二郎らのグループの一員となり、ラファエル前派への傾倒を共有する。なかでもロセッティを好んだ。1904年夏には青木と坂本、福田たねとともに布良を旅し、この時『海の幸』が描かれている。1906年美校卒業。1907年第1回文展に油彩画『湖畔』が入選、1908年から太平洋画展にも出品。同年、後述する雑誌『方寸』をめぐる交友から「パンの会」に参加。1913年无声会に水墨画を出品、同年石井柏亭らと「日本水彩画会」を結成。1914年渡仏、セザンヌに心酔して自然という題材に目を開かれ、翌年帰国してからは日本の風景、とりわけ生まれ育った関東平野に画題を定める。以後次第に水墨画に軸足を移し、素朴で飄逸な独自の作風を築いて行った。1916年珊瑚会出品、同年第3回院展に『天草の一村』『見下したる港町』を出品して同人となる。1920年日本美術院洋画部を連袂脱退、1922年「春陽会」を結成。1929年の帝国美術学校創立にあたっては洋画家主任教授となった。1932年食道癌を患い千葉医科大学付属病院に入院、1933 (昭和8) 年4月8日同病院で逝去。翌年の第12回春陽会展には遺作室が設けられた。文筆家としてもよい仕事を残し、没後に刊行された『平野雑筆』『恒友畫談』『畫生活より』(古今書院 1934) にまとめられている。

少年時代に新聞のコマ絵に惹かれ、とりわけ不折の俳画を好んだといい、長じて明治期の末から大正期の初めにかけて版の仕事が多く手がけている。1905年9月『方寸』

の前身というべき『平旦』の創刊に参加、第1号では莊野宗之助《老婆》(石版彩画)の製版を手がけ、第3号には「森田あかつき」名で《一部の状態》(2色写真版)を寄せた。次いで1907年5月、製版や印刷に詳しい山本鼎・石井柏亭とともに同人として美術文芸雑誌『方寸』を創刊、第1巻第1号以降のほとんどの号に参加して「恒友」名だけでなく「あかつき」や「△△△生」名で石版、ジंक版、エッチング、木版などによる作品を発表。『方寸』はその後倉田白羊や小杉未醒、平福百穂、織田一磨、坂本繁二郎らを同人に迎えて1911年まで続き、通巻35号を世に送り、創作版画を実作をもって提唱する記念すべき出発点となった。森田の作は素描力の高さを活かした生活者の・風刺的視点からなるもの、あるいは青木繁を彷彿とさせる耽美な女性像や図案があり、力の入った佳品が多い。評論や散文、俳句も寄せ、また第4巻第7号から第5巻第2号では編輯兼発行者を務め、二種の『方寸画暦』にも参加している。『方寸』以外の仕事としては(以下は創作版画ではないが)、同誌刊行中の1908年、太平洋通信社に所属して雑誌『サンデー』に諷刺漫画を描き、1911年には織田一磨とともに大阪の帝国新聞社に入社、同様の仕事を手がけている。この頃は『読売』『報知』『東京日日』などの新聞や『東京パック』『現代』『太陽』『早稲田文学』『ホトトギス』などの雑誌にも漫画や挿絵を残している。木版作品に、1917年に中島重太郎が主催する日本風景版画会から伊上凡骨の彫りにより版行した『日本風景版画 第二輯 会津之部』と『同 第五輯 天草之部』があり、最後の版の仕事として、山本鼎に勧められて制作したという1922年のジंक版《犬吠風景》がある。没後の1933年12月、柏亭が所蔵していた『方寸』の画稿を集めて『方寸』展が開催された(主催:室内社畫堂/会場:銀座紀伊国屋ギャラリー)。**【文献】**森田恒友「版畫『野鷄』」『読売新聞』1912.12.22(『恒友畫談』に再録)/森田恒友「簡素な一芸術」『大阪朝日新聞』日曜付録「版画展覧会」(1913.11.16)(『現代の洋画』23 1914.2に再録)/山本鼎「方寸時代」『アトリエ』4-8(1927.9)/平福百穂「森田君を憶ふ」『アトリエ』10-5(1933.5)/石井柏亭「恒友の古い挿画」『中央美術』復興10(1934.5)/石井柏亭『柏亭自伝』(中央公論美術出版 1971)/『方寸』復刻版(三彩社 1973)/『セザンヌから浴衣がけの絵画へ 平野の詩人 森田恒友とその時代』展図録(埼玉県立近代美術館 1991)/『日光×会津 小杉放菴と喜多方美術倶楽部の人びと』展図録(小杉放菴記念日光美術館 2010)/『創作版画誌の系譜』(西山)

森田路一(もりた・みちかず)

1932(昭和7)年の第2回日本版画協会展に木版画《郊外風景》が入選。続いて1934年の第8回構造社展に《風景》(版画か)が入選。その後、1936年の第5回日本版画協会展に木版画《柘榴のある静物》《野菜色々》が再び入選。以後、第6回展(1937)に《海》《山麓風景》《早良風景》、第7回展(1938)に《糸島風景》、第8回展(1939)に《初夏風景》《仁科風景》、第9回展(1940)に《牧場風景》、第10回展(1941)に《海辺風景》を出品し、1944年に会友に推挙された。その間、1938年の第2回新文展にも《秋色風景》が入選。1940年には旭正秀・大宮昇と「新版画会」を結成。第1回展(11.8~20 銀座・中央ギャラリー)の出品作品は不明だが、1941年の第2回展(11.14~16 銀座・資生堂)に《万寿山仏香閣風景》《紫禁城風景》《菓子売》《北支風景》《静物》《風景》、1942年の大阪展(1.11

~17 梅田・阪急)に《万寿山仏香閣風景》《紫禁城風景》《北京の裏町》《菓子売》、第3回展(2.11~13 銀座・資生堂)に《石仏》ほかを出品。また、1941年の仏印巡回日本絵画展(内示会:9.9~10 日本橋・三越、その後10月からハノイ・サイゴンなど巡回)に木版画《伊豆風景》を出品した。**【文献】**『第2回新版画会展』目録(1941)/『仏印巡回日本絵画展覧会内示会出品目録』(1941)/『新版画会展覧会出品目録(大阪展)』(1942)/『美術文化新聞』61(1942.11.9)/『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)(三木)

森田 豊(もりた・ゆたか)

明治期に発行された石版印刷の業界誌『虹』第1巻6号(1908.7)に多色石版画の表紙絵、第1巻7号(1908.8)には単色石版画《舟大工》《船の休職》《大漁》《会議》を発表する。現在、『虹』は第1巻1号~第3巻6号(1910.6)のうち19号分が確認されている。**【文献】**『創作版画誌の系譜』(加治)

森谷南人子(もりたに・なんじんし) 1889~1981

1889(明治22)年7月14日岡山県小田郡大井村に生まれる。本名は利喜雄。1915年頃から「南人子」の雅号を用いる。別号に雪山・梢月。1894年神戸に転居。神戸市立尋常高等小学校に在学中、上級生の村上華岳(当时は武田震一 1888~1939)を知る。1905年京都市立美術工芸学校絵画科に入学。1909年同校を卒業し、新設された京都市立絵画専門学校本科に進む。1913年本科を卒業。研究科に進み、1915年卒業。展覧会は、1913年に河合卯之助・内藤琪土(房次郎)・松宮實・村上華岳とともに試作展(11.3~5 京都・三條青年会館)を開催し、絵画《雨後》《森》など6点(種別は不明)と陶器《角灰皿「花と鳥」》など6点を出品。また、1913年頃からは文展にも出品したが、入選は果たさなかった。

版画は、美術工芸学校の同期で親交のあった河合の影響で始めたものと推定されるが、木版画を手がけ、1914年春頃に京都の佐々木文具店で開かれた版画展に出品。『美術と工芸』第2号(柳屋書店 1914.7)に入江幾次郎(波光)・河合・松宮らとの創作版画集の販売広告が掲載された。その後、佐々木文具店発行の『鳳梨(アナナス)』第1号(1914.11)の裏表紙絵に《樹》第2号(1915.3)に《小湾》を発表。また、1914年12月頃には、河合らと同人誌『黙鐘』(翌年7月の第8号から『光芒(コロナ)』と改題)の創刊に参加し、木版画による表紙絵・扉絵などを発表。『光芒』主催の第1回絵画工芸展(1915.7.7~14 京都・大丸)にも参加したが、出品は油彩画だったようである。1916年岡山県笠岡に転居。1918年4月には自刻木版画の頒布会「森谷利喜雄 木版画会」(6点組、6円、30部)を催した。翌1919年の第1回日本創作版画協会展に《静物》《冬の日》が入選。以後、第2回展(1920)に《静物(椿)》、第3回展(1921)に《崖ノ樹》など5点、第4回展(1922)に《崖の樹》など4点が入選。1928年には会友に推挙され、第9回展(1929)にも《乾かれひ》《柿》《いわし》を出品している。その間、1922年に神戸弦月画会が主催した創作版画展(2.3~26 神戸・三宮三〇九番館)に《五月の頃》《荒地》《早春の丘》《崖の樹》《冬》《三月の小湾》を出品。また、1926年に岡崎の近藤孝太郎が主宰する洋画団体「我々の会」第1回作品展(4.14~20 岡崎図書館)にも《五月の頃》を出品した。創作版画誌への参加もあり、『詩と版画』(旭正秀編)の第3輯

(1923.7) に図版《緑布の上の林檎》、第9輯(1925.1)に《秋景》、『HANGA』(山口久吉編)の第2輯(1924.5)に《入江》、第6輯(1925.6)に《河べり》、第8輯(1925.12)に《麓の村》、第14輯(1928.11)に《池のほとり》、『版藝術』(料治熊太)の第9号(1932.12)と第21号(1933.12)の「全日本版画家年賀状百人集」に《年賀状》を発表した。

本業の日本画は、1918年の第1回国画創作協会展に出品した《快晴》が選外となって陳列され、翌年の第2回展に出品した《朝》も選外となって陳列された。1920年広島県尾道に転居し、定住。その後、1924年の第4回展に《秋の日》が入選。以後、第1回春季展(試作展 1925)、第5～7回展(1926～1928)に連続して出品。その間、1926年には会友に推挙された。1928年の国画創作協会第一部(日本画)解散後は、「新樹社」の設立に参加。第1回展(1929)に《夕月》《夏景二作 雨後 日盛》《早春麗日》と版画《蛙》《乾かれひ》《色糸》、第2回展(1930)に《晩秋の夕》を出品した後、1930年の第11回帝展に《苗代田》が入選。以後、第12～15回帝展(1931～1934)・改組第1回帝展(1936)・昭和11年文展鑑査展(1936)・第2回新文展(1938)・紀元2600年奉祝日本画展(1940)などに出品。また、1932年からは日本南画院にも出品するようになり、第11回展に《暮秋野色》が入選。以後、第12～14回展(1933～1935)に出品した。戦後は中央展への出品はなく、広島県展(1949～)・尾道市展(1957～)に出品し、審査員などを務めた。1981(昭和56)年3月11日広島県尾道市で逝去。【文献】原田敦子編「年譜」『近代陶芸の文人 河合卯之助展』図録(宮城県美術館 1997)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『森谷南人子のすべて』展図録(笠岡市立竹喬美術館 2004)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『創作版画誌の系譜』(三木)

森本昌一 (もりもと・しょういち)

「1937.1.1」日付入で《〔風炉釜〕》を描いた銅版の賀状を制作。武藤完一と交流のあったエッチャーと思われる。【文献】『武藤完一蔵 エッチング小品集』(樋口)

森山収二 (もりやま・しゅうじ) ➡北沢収治 (きたざわ・しゅうじ)

両角 玄 (もろずみ・げん)

長野県諏訪市に生まれる。長野県師範学校一部3年生に在学中、同校生徒による版画同人誌『樹氷』(1938～1941 4冊確認)の第1号皇紀2598年版(1938)に《冬の諏訪湖》を発表。その後4年生になり第2号皇紀2600年版(1940)に《故郷雪景》、5年生では第3号(1940～1941?)に《風景》を発表している。1941年3月に同校を卒業。その後、長野市立後町小学校などに勤務。【文献】『樹氷』1・2・3／『卒業生名簿 昭和25年』(信州大学教育学部本校 1950)(加治)